
超！刑事宣言

SUMERAGI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超！刑事宣言

【Nコード】

N78050

【作者名】

SUMERAGI

【あらすじ】

キャリア1年目の刑事とそれを取り巻く刑事たちの物語。

キャラクター視点で話が進んでいきます。

序章 渋谷西警察署

〔序章〕 渋谷西警察署

東京渋谷、人口約20万人。その中に現在全国の若者の憧れであるセンター街や109、丸井百貨店などを擁する街。ここを管内とする警視庁第三方面渋谷西警察署がある。全署員507名を抱える全国規模でも大きな警察署であり、地上13階、地下2階で構成されている。

1階はまず受付がある、来訪者はまずここを通らないと奥にあるエレベーターで他の階に行けない様になっている。受付に座っているのが警察官であることを除けばオフィスビルの受付を彷彿とさせる。

2階は観光案内課になっており、ここへは受付脇の階段から上がれるため部外者の往来は多い。渋谷は全国でも若い観光客が多い街として知られているせいか警察官たちも比較的年齢の若い警察官が多数配置されているのも特徴である。

3階は交通課、違反などを取り締まる部署である。渋谷駅周辺は地下鉄副都心線が出来たとはいえ渋滞が絶えず、路上駐車を取り締まるのも一苦勞。レッカー移動させようもの七かなりの時間がかかってしまうのが現状である。また、首都高速中央環状線と3号渋谷線が大橋JCTでぶつかる地点があることから白バイ隊も充実。東名高速から3号線に入る車と中央環状線から3号線に入る車が接触事故を起こすことがしばしばあるのだ。

4階は柔道場、5階は剣道場になっていて近所の小中学生が柔剣道を習いに通ってきている。物騒な世の中子供に武道を習わせたいと言う父兄が急増し、署長の提案により始められたもので生徒は各60人位いる。

6階は警務課、7階は会計課であり、この2つは会社で言う総務

と経理に当たる。

8階には大会議室。滅多に起こるものでもないが殺人事件やテロ事件大きな事件が起きた場合ここに特別捜査本部が設置される。9階に小会議室が2つに副署長室。普段の捜査会議などはここで行われる。副署長は刑事の捜査関連は刑事課長に一任しているのであまり出てこない。

10階は鑑識課。ここは事件が起きたときの初動で動く部署であり、設備は警視庁随一と呼ばれている。近隣の所轄（とりわけ表参道署や西参道署）からの応援要請もとても多い。

11階は生活安全課。渋谷は百件店風俗街を抱えているほかにも中国人の違法エステも多く取締りが絶えることが無い。また、新宿等から不法入国の外国人が流れている関係上外国語に卓越した刑事が多いのも特徴だ。また、少年犯罪も多い。基本この階の刑事たちはスーツを着用しない。クラブでの聞き込みが多いからだ。

そして12階が刑事課。この物語のメインである通称『刑事部屋』である。この物語はこの強行犯係に配属されたキャリアの警察官の物語である。

ちなみに13階は署長室である。

く 身上調査書 く (1) (前書き)

この物語で活躍するオリジナルキャラクター

(もちろん、全てがオリジナルですが先ずは主要人物から)

舞台は2023年の秋なので、その時点での年齢となっている。

（身上調査書）（1）

2023年秋現在のものです。

1、神ノ木 かみのぎ 誠治 せいじ

2000年5月9日生まれ（23歳）。血液型O型

警視庁渋谷西警察署刑事課強行犯係 警部補

出身地：北海道 茅部郡森町 かやべくん

現住所：東京都世田谷区

経歴：

2023年3月 北海道大学法学部卒業

4月 警察庁入庁（国家公務員1種）

9月 現職

使用拳銃：コルトM1911ガバメント

捜査車両：マツダ スピードアテンザ

幼少時に会った刑事にあこがれ警察官を目指していた本編の主人公。北海道大学を卒業後、警察庁に入庁。東大閥が都市伝説になっているとはいえまだ少数派。警察大学校卒業後、渋谷西署に研修配置されることになった。警察庁官舎には住まず上馬のアパート暮らし。

2、芳形 ひかる

1998年10月10日生まれ（24歳）。血液型A型

警視庁渋谷西警察署刑事課強行犯係 巡査

出身地：静岡県沼津市

現住所：東京都墨田区

経歴：

2019年3月 静岡英和学院大学短期大学部卒業

4月 警視庁巡査拝命

12月 警視庁本所警察署 地域課

2023年3月 現職

使用拳銃：ベレッタM92

今年晴れて刑事となる。暫く見習いと言う立場で耀の下についていたが、神ノ木が配属されたことにより正式にコンビを組むことになる。実兄も警察官である。

3、栗飯原 吏輝

1980年7月10日生まれ（43歳）。血液型B型

警視庁渋谷西警察署刑事課課長代理 警視

出身地：東京都新宿区

現住所：東京都目黒区

経歴：

2005年3月 日本大学大学院経済学研究科修士課程修了

4月 警察庁入庁（国家公務員2種）

11月 北海道警察 函館方面 森警察署 刑事・生活安全

課 巡査部長

2006年11月 新潟県警察 機動捜査隊 警部補

2008年9月 警視庁 新宿中央警察署 刑事課 暴力犯

係長代理

2009年10月 外務省 アジア大洋州局 中国課

2010年7月 警察庁 刑事局 広域捜査課 警部

2016年2月 警視庁 刑事部 捜査一課 管理官 警視

2022年10月 現職

使用拳銃：S & W M500 4in

S & W M649 ボディーガード（妻

の形見）

捜査車両：マセラティクワトロポルテ

いわゆる国家2種の準キャリア。かつては広域捜査課捜査員や捜査一課管理官を歴任したと言う捜査の権威。捜査一課ではで総ての犯人の目星をつけることで検挙率が以上に高いことで警視庁内でも有

名となっていた。妻も刑事であったが被疑者に打たれ殉職。それを機に事件が起きた渋谷西署に留まることとなる。

4、楠 智晴くすのき ともはる

1990年11月10日生まれ（32歳）。血液型O型

警視庁刑事部捜査一課管理官 警視

出身地：北海道江別市

現住所：警察庁官舎

経歴：

2013年3月 北海道大学法学部卒業

4月 警察庁入庁（国家公務員1種）

9月 山梨県警 都留警察署 生活安全課 警部補

2014年4月 警察庁刑事局刑事企画課 警部

2018年3月 愛知県警 知多警察署 刑事課長代理

2020年8月 愛知県警 知多警察署 署長 警視

2022年10月 現職

当時東大閥といわれた警察庁の中でも北大卒という少数派。それなりに人並み以上の努力を自分に課している。本来なら警察庁に戻れるところを自ら管理官の職を買って出た。少しでも捜査の現場を知り警察の内部機構を変えようと言う理想に燃えている。

5、渡瀬 恒広わたせ つねひろ

1968年3月9日生まれ（55歳）。血液型A型

警視庁渋谷西警察署署長 警視正

出身地：岡山岡山市

現住所：渋谷西警察署署長官舎

経歴：

1991年3月 東海大学文学部卒業

4月 警視庁巡査拝命

10月 警視庁 青梅警察署 地域課
1995年11月 巡査部長に昇任
1998年8月 警視庁 高島平警察署 交通課
2002年5月 警視庁 小松川警察署 刑事課 強行犯係長
警部補

2006年12月 警視庁 町田警察署 刑事課長 警部
2009年9月 警視庁 刑事部 捜査一課 四係長
2013年7月 警視庁 刑事部 捜査一課 理事官 警視
2020年10月 現職

ノンキャリアとしては考えられる限り出世したある意味名誉な署長。かつては捜査一課の捜査員または理事官として数々の難事件を解決していて、その武勇は今でも捜査一課の伝説となっている(そのせいか一課長は渡瀬署長にライバル心むき出しになっていると言う噂もある)。

6、^{てる}耀 ^{まひあき}雅昭

1964年12月7日生まれ(58歳)。血液型AB型

警視庁渋谷西警察署刑事課強行犯係主任 巡査部長

出身地：富山県滑川市

現住所：東京都新宿区

経歴：

1982年3月 富山県立滑川高等学校卒業

4月 警視庁巡査拝命

12月 警視庁 駒込警察署 警邏課

1986年10月 警視庁 愛宕警察署 警務課

1989年9月 警視庁 六本木警察署 刑事課 強行犯係 巡

査長

1994年2月 巡査部長に昇任

1997年6月 警視庁 新宿中央警察署 刑事課 強行犯係主任

2006年11月 警視庁 機動捜査隊本部池袋分駐所

2015年1月 警視庁 野方警察署 刑事課 強行犯係主任
2022年3月 現職
使用拳銃：コルトパイソン 4インチ
34年間刑事一筋でここまで来たベテラン中のベテラン。これまで数多くの敏腕刑事を育ててきた。しかし、その分刑事として傷ついてきたことも多い（渋谷西署ではそれにふれてはいけない暗黙の了解がある）。恐らく神ノ木を指導するのが最後になるであろう。

7、こおり 郡 としかつ 俊勝

1976年4月30日生まれ（47歳） 血液型A型

警視庁渋谷西警察署刑事課長兼生活安全課長 警視

本籍地：千葉県習志野市

現住所：東京都大田区

経歴：

1995年3月 千葉県市立船橋高等学校卒業

4月 警視庁巡查拝命

12月 警視庁 志村警察署 地域課

2000年7月 警視庁 城東警察署 地域課 巡查部長

2009年8月 警視庁 大井警察署 会計課 警部補

2014年12月 警視庁 町田警察署 生活安全課長 警部

2019年9月 現職

刑事課長、生活安全課長でありながら接待課長や宴会課長自称している。部下であるものの捜査キャリアでははるかに及ばない栗飯原には頭が上がらない一面も。しかし、暴走に対して上には男気を見せる一面もあり信頼は厚い。

8、さいとう 西塔 えいすけ 英介

1967年8月18日生まれ（56歳）。血液型B型

警視庁刑事部捜査一課課長 警視正

出身地：神奈川県川崎市

現住所：東京都中央区

経歴：

1990年3月 明治学院大学経済学部卒業

4月 警視庁 巡査拝命

10月 警視庁 光が丘警察署 地域課

1993年9月 巡査部長に昇任

1998年8月 警視庁 福生警察署 交通課

2002年9月 警視庁 多摩中央警察署 刑事課 強行犯主任

2003年12月 警視庁 本富士警察署 刑事課 盗犯係長 警

部補

2006年12月 警視庁 町田警察署 刑事課長 警部

2009年9月 警視庁 刑事部 捜査一課 三係長

2013年7月 警視庁 東京湾岸警察署 副署長 警視

2020年2月 現職

ノンキャリアの総本山と呼ばれる警視庁捜査一課の首領。捜査員時代は渡瀬としのぎを削りあつて検挙率に貢献してきた。管理官であり部下である楠に対してもその激昂は容赦が無い。ゆえにキャリアが最も恐れる人物である。

9、栗飯原 恵

1985年3月24日生まれ、2022年4月16日没（享年37歳）。血液型O型

旧役職：警視庁渋谷西警察署刑事課強行班係主任 巡査部長（2階級特進で警部）

出身地：東京都清瀬市 旧姓：一瀬

経歴：

2005年3月 十文字学園女子大学短期大学部卒業

4月 警視庁 巡査拝命

12月 警視庁 愛宕警察署 交通課

2008年9月 警視庁 成城警察署 生活安全課 少年係
2010年7月 巡査長に昇任
2016年2月 警視庁 渋谷西警察署 刑事課強行班係
2020年4月 巡査部長に昇任
2022年4月 殉職 2階級特進
使用拳銃(当時) : S & amp ; W M 6 4 9 ボディーガード
捜査車両(当時) : スバル レガシイB4
かつて渋谷西署に在籍していた女刑事。栗飯原吏輝とは2008年
秋に見合い結婚。同時に警視庁に戻され同時に刑事となる。渋谷で
起きた殺人事件の被疑者を追っていた際に拳銃で心臓を撃たれ即死。
被疑者はまだ逮捕されていない。

く 身上調査書く (1) (後書き)

上記が主要人物です。僕自身最初に登場人物から決めて行くので話の流れはつくりやすいのです。

く 身上調査書く (2) (前書き)

この物語で活躍するオリジナルキャラクター

(物語の途中で出てくる刑事・随時更新します)

（身上調査書）（2）

10、千堂 尚樹 せんどう なもき

1986年6月29日生まれ（37歳）。血液型A型

警視庁刑事部捜査一課 7係主任 警部補

出身地：東京都大田区

現住所：東京都大田区

経歴：

2009年3月 駒沢大学経営学部卒業

4月 警視庁巡査拝命

10月 警視庁 調布警察署 地域課

2012年4月 巡査長に昇任

2014年4月 警視庁 東京湾岸警察署 刑事課 強行犯係

巡査部長

2019年1月 警視庁 渋谷西警察署 刑事課 強行犯係長

警部補

2022年12月 現職

使用拳銃： S & a m p ; W M 6 8 6 3 i n

捜査車両： トヨタ アルテツア

捜査一課に配属になる前は渋谷西警察署にいた刑事。栗飯原の転属とほぼ同じくして本庁の刑事になった。当時の部下であった栗飯原恵の殉職は自分のせいであると思ひ込み、助けになろうとしているが、実際犯人の目星が着いてないせいか若干焦っている。

11、羽根田 一成 はねだ いっせい

1989年8月29日生まれ（34歳）。血液型B型

警視庁渋谷西警察署刑事課強行犯係長代理 警部補

出身地：東京都品川区

現住所：東京都渋谷区

経歴：

2012年3月 立正大学経営学部卒業

4月 警視庁 巡査拝命

10月 警視庁 天現寺警察署 地域課

2016年10月 巡査部長に昇任

2017年4月 警視庁 外神田警察署 刑事課 強行犯係

2023年9月 現職

使用拳銃： コルトアナコンダ 4in

捜査車両： 日産 スカイライン

たった4人体制となっていた渋谷西警察署に新たに配属になった刑事。神ノ木や芳形からすると先輩に当たる。常に冷静沈着で刑事はサラリーマンを主張するが、少林寺拳法四段であり、外神田署時代は犯人を気絶に至らしめたこともある熱き刑事。

12、^{よりふじ}依藤 ^{みか}美果

1981年3月1日生まれ（42歳）。血液型O型

警視庁渋谷西警察署生活安全課課長代理 警視

出身地：神奈川県藤沢市

現住所：東京都目黒区

経歴：

2005年3月 日本大学大学院経済学研究課修士課程修了

4月 警察庁入庁（国家公務員2種）

10月 福島県警察 郡山警察署 生活安全課 巡査部長

2006年11月 福島県警察 生活安全部 生活環境課 警部補

2007年4月 警視庁 成城警察署 生活安全課 少年係係長

2012年10月 警察庁 生活安全局 生活安全企画課 警部

2013年4月 山口県警察 生活安全部 少年課 管理補佐官

2017年4月 法務省 東京入国管理局

2018年4月 警視庁 生活安全部 保安課 管理官 警視

2021年5月 現職

使用拳銃： S & a m p ; W M 5 9 0 6
捜査車両： アルファ・ロメオ159
生活安全課を取り仕切る女ボス。少年犯罪や売春摘発のエキスパート。渋谷管内はそういった犯罪が多いの為、警視庁から転属になった。栗飯原夫妻とは旧知の仲（栗飯原吏輝とは大学院の同期、栗飯原恵の指導刑事）。女性の視点で売春摘発をするため、元締めを見つけたら容赦がない。双子の母。

13、佐波^{さか} 宏昌^{ひろまさ}

1996年6月15日生まれ（27歳）。血液型AB型

警視庁渋谷西警察署生活安全課保安係 巡査部長

出身地：埼玉県さいたま市

現住所：東京都渋谷区

経歴：

2019年3月 首都大学東京都市教養学部卒業

4月 警視庁巡査拝命

10月 警視庁 羽村警察署 地域課

2022年10月 警視庁 渋谷西警察署 生活安全課 保安係

2023年4月 現職

使用拳銃： コルトパイソン 3in

捜査車両： スバル レガシイ6

生活安全課の新人刑事。東京郊外の交番勤務であったが2022年に強盗の被疑者を逮捕したことから（自分の意志とは関係なく）刑事への道がひらけた。生活安全課を選んだのは「刑事課より殉職の心配がないから」。しかし配属された保安課は麻薬と拳銃を扱う部署と聞いておっかなびっくり。張り切りすぎて空回りし、依藤の手を焼かしている。女子高生が苦手で、芳形に押し付けている。

く 身上調査書く (2) (後書き)

ここは随時追加していきます。

幹部候補生の初出勤（前書き）

お待たせいたしました。ここからが本編です。
先ずは新人刑事の登場です。

幹部候補生の初出勤

僕の名前は神ノ木誠治。先日国家公務員試験？種をパスし警察庁に入庁した、いわゆるキャリア組と呼ばれている部類に入る警察官だ。

幼稚園くらいの時、地元で見た刑事さんがかつこ良くて、それでも警察を目指した。

警察大学校での研修を終え、今日警視庁の渋谷西警察署に研修配置されることになった。同期には青森県警察に配置されたり広島県警察に配置されたりしている中で、僕はまあ恵まれているほうなのだろう。しかし、東大閥でもない僕が何故？と思う事がある。警察庁に限らず官僚と言うものは東大閥が根強く残っていると聞いたが今の警視庁副総監は僕と同じ北大出身。東大閥もすでに都市伝説になつてるのかもしれない。

たった今渋谷駅を降りて警察署に向かっている。東京は学生のとくに来たことはあるけど朝からこんなに騒々しい街は初めてだった。通勤途中のサラリーマン、夜通し遊んで朝帰りする若者たち（こいつら仕事しているのか？）、昨夜のゴミを回収している清掃員、そのゴミをつつく無数のカラス……。何もかもが新鮮だ。そして見えてきた13階建てのビル、ここが僕が今日からお世話になる『警視庁渋谷西警察署』である。

署の中に入ると朝から来訪者でごった返していた。何でもこの署には観光者案内課見たいのがあるらしいのでその影響だろう。僕は受付にいた制服警官に告げた。

「きょうから、刑事課強行犯係に配属された、神ノ木誠治です。」
すると制服警官は背筋を伸ばし敬礼をして

「はっ！お話は伺っております！奥のエレベーターで13階に上がってください！」

僕は、「有難う御座います」と一声かけて奥のエレベーターへ向

かった。

13階へ付いた僕は目の前にいた婦警に出迎えられた。

「お待ちしておりました神ノ木警部補、署長がお待ちです。」
「は……はい……」

おそらく署長の秘書だと思われる婦警（そんなのいるのかどうかは分からないが）に連れられて入ったのは署長室。

「神ノ木誠治警部補です。警察庁入庁後、警察大学校での研修を
追え本日付でこちらでお世話になることになりました！」

「ああ、神ノ木君、私が署長の渡瀬だ。ここにいる間はわずかだ
と思うが少しでも警察の現場が何かというものを覚えて本庁に帰っ
てくれたまえ。君はおそらくこの先現場にたつことなど無いだろう
からな。」

「は……はい！誠心誠意、頑張らせて頂きます！」

僕は緊張のあまり大声を上げてそういつたら署長は「うむ。」と
返事をして、

「君の配属は刑事課の強行犯係だったね。早速案内させよう。刑
事課はこの一つ下の12階だ。刑事課長には連絡しておく。」

僕は「了解しました」と返事をして署長室を後にした。

12階の刑事課に着いた僕はそのフロアにまず驚いた。エレベーターを降りたらそこはガラス張り、刑事ドラマとかで見る刑事部屋とは想像にもかけ離れたところだった。中に入り刑事課長に挨拶に行く。

「今日からこちらに配属になった神ノ木です。」

「ああ、君ね！署長から聞いた、うちで預かるキャリア様つてのは」

預かる？課長はどういうつもりでこんな発言をしたんだろう……。

「今ね、皆事件で出払っちゃってるんだよ。さつきセルリアンタワーで殺人事件があつてね、おそらく特捜になると思っから皆帰っ

てくるまでお茶でも飲んで待つてよ」

「は・・・はい？」

まったく意味が不可解だ。殺人事件があったなら「君もすぐに現場に急行してくれ！」と言うのが普通なのに・・・。そこで僕は食って掛った。

「お茶でも飲んでつて・・・殺人事件なら現場に急行すべきではないんですか!？」

「殺人事件の初動捜査は機動捜査隊の仕切りなんだよ。言っただけやることないよ、もうすぐ皆帰ってくる、ほら。」

そういつているうちに刑事が3人帰ってきた。先頭の長身の刑事が課長に向かって報告した。

「現場行ってきたんですけど聞けたのは絞殺であること、他にないかどうか司法解剖になるそうです」

「うむ。ご苦労だった、あつそうだ。今日から配属になった神ノ木警部補だ」

僕は言われて驚きまわりに頭を下げ、「神ノ木です、宜しくお願ひします」と挨拶をした。

「そうか、俺は課長代理の栗飯原だ。今は強行犯係長も兼任してる。で、今そこに座っているのが耀^{てる}巡查部長、俺らはテルさんと呼んでる」

耀と言われた老刑事は手を挙げただけで新聞から目を離さない。

「そして、そこにいる女が、まあこいつもこの春刑事になったばかりなんだが、芳形^{よしかた}巡查。俺らはひかるって呼んでる」

「そして、私が課長の郡^{しほ}だ。強行犯係はこの4人で行くからよろしく頼むよ。」

今の課長の声には驚いた。刑事が慢性的に不足しているとはいえ、たった4人とはどういうことなんだろう。そう思ってたなら栗飯原係長が僕に声をかけた。

「君の机はそこだ。普段は階級別なのだがお前は一番後輩だから」

「はい・・・わかりました」
そうして僕は席に着いた。まあ、一応キャリアだけど一番後輩だもんな。

席に着いたけど何をしていたかわからない。とりあえず隣の席の芳形さんに聞いてみた。

「あの・・・芳形さん、僕はいつたい何したら・・・」
と僕が尋ねると芳形さんは、

「そんなのあたしに聞かないでよ、あたしはこれから今の報告書書かないといけないんだから・・・。」
と突っ返されてしまった。

そんなときに郡課長の電話が鳴った。

「はい、刑事課・・・分かりました、すぐ行かせます。センター外のプリクラのメッカで女子高生同士が喧嘩、けが人出てる。」
それに粟飯原係長がこう答えた

「報告書は俺のほうでやっつくから芳形君すぐいって。」

「分かりました、行ってきます」

「それから・・・神ノ木君も一緒に」

え？僕も？いやいやもつとやることあるでしょうにと思いつつ答えた。

「いやあの、セルリアンタワーの殺人事件の捜査は・・・」

「それは司法解剖の結果出るまで待つて」

「そんなことしてたら殺人犯逃げちゃいますよ！」

そんなやり取りをしていると芳形さんに腕をつかまれて、

「事件の大きさをやる気変えるのやめなさい！」

と一喝され僕らは出発の準備をした。そのとき驚きの言葉を粟飯原係長は発した。

「あ、そうだ！ひかるももう新人じゃないんだから今日から神ノ木君と組んでもらう」

これに僕以上に驚いたのは芳形さんで、

「私一人では無理です！」

とまたまた一喝。

「テルさんと組んでいるうちにお前はテルさんに甘えてきている。そろそろ自分の判断で捜査をしてもいいんじゃないか？」

「……」

芳形さんも戸惑ってるようだ。そこで僕はなだめる様に、

「芳形さん行きましよう、事件解決して結果で見せ付けてやりましようよ。」

と一言いい芳形さんと現場に向かった。

「ねえ、何でみんな殺人事件の捜査しないんでしょう？」

僕がこう尋ねると芳形さんは、

「殺人事件は本社がやるの。うちらはそのお手伝い」

となんともまあやる気の無い返事

「じゃ、うちの管轄で起きた事件なのに何も出来ないんですか？」

「そういう規則。」

規則って……昔の刑事ドラマでもそればっかだったな……それじゃ何のために所轄がいるんだろう……僕は不思議に思った。

「現場に行くから覆面車出して、警務課には連絡入れてあるわ。」

僕は「分かりました。」と告げて地下駐車場に向かった。駐車場には警務課の制服警官がすでにいて、

「この車両を使ってください、鍵はこちらです。この捜査車両は神ノ木さん専用の車両になります、ご自由にお使ください。」

「すっげえ……スピードアテンザだ……」

と途方に暮れていたなら芳形さんが走ってきた。

「神ノ木君遅い！出発するよ！」

「さ、行きますよ。回転灯出してください」

して、回転灯とサイレンを鳴らしながらセンター街へ向かった。

センター街に着くと生活安全課の刑事が1名すでに到着していた。
颯爽と芳形さんがその刑事に近づき、

「喧嘩の原因つてなんだつたんですか？」とたずねた。

その刑事は

「おお、芳形君か。なんかねえ、彼氏の二股がばれて取り合いで大喧嘩になったみたいなんだよ」

つて困った顔で行ってる。ちょっと待てよ、まさかこんな痴話喧嘩のために僕らまで借り出されたんじゃないだろうな？その刑事はこう続けた。

「彼氏と女子高生2名を署に連行して取調べ、芳形君は女子高生のほうおねがい。俺は彼氏のほうに事情を聞くから」

「またですか、佐波^{さば}さん、最近あたし女子高生の相手ばっかり」

「頼むよお、今うちの女性も補導で手が離せなくて事件は刑事課にお願いしてるんだよ。」

「分かりましたあ、今度おごってくださいねえ。ほらっ神ノ木君そのこたち車に乗せて！」

と芳形さんが彼女たちを引っ張ってきた。

「分かりました、しつかしなんで僕らがこんな仕事してるんですよ？女子高生なら少年課でしょうに。」

僕は不満でしょうがない。でも芳形さんは、

「さつき佐波さんが行っていたようにこの街は若者が多くて、少年課も困ってるみたいよ。困ったときはお互い様よ。」

と言ってきた。まあ、それもそうか。僕はしぶしぶ女子高生たちを車に乗せ署に帰った。

署に帰った僕らは女子高生を連れて12階の刑事課に戻った。芳形さんは一人を連れて第2取調室に入っていた。僕はどうしようとして戸惑っていたら一人の婦人警官に声かけられた。

「今日配属になった刑事さんですか？」

「え…ええ、そうですけど」

「あたし、観光案内課の長坂優奈といいます。女性取り調べるつて芳形さんから言われて立ち会うように言われました。」
そうだった、女性取り調べるときは女性をたち合わせないといけな
いんだった。後で裁判で問題になるとか行つてたっけな。

「そうなんだ、じゃ、宜しく頼むよ。」

といい、長坂さんともう一人の女子高生を第1取調室に案内した。

「名前と住所を教えてくださいな。」

「羽村美穂、S女子高校の3年生です。」

と答えたとき彼女は泣き出してしまった。長坂さんは、

「おそらく…二股かけられたほうの彼女みたいですね、109に買
い物に出た帰りに偶然彼氏と別の女性が歩いてるのを見て追いか
けたつてところですかね。」

「すばらしい推理だねえ、で、そうなの？」

と僕が尋ねたら彼女は首を縦に振った。おそらく凶星らしい。彼女
はやつと口を開いた。

「それで…プリクラのメッカに入っていくのを引きとめようとした
ら…あいつがいきなり…」

「もうそれ以上言わなくていい、概要は分かったから。」

僕は聞かなくても分かってきた。彼女も被害者なんだ。二股かけて
た二人が確実に悪いのは誰の目から見ても明らかだった。僕は彼女
を早々に釈放した。

芳形さんのほうも終わつたらしく、自分の席でコーヒーを飲んでい
た。僕は長坂さんを連れて自分の席に戻った。

「芳形さんそつちどうでした？」

「うん。私のほうは、彼氏に分かれることをずっと言い続けてたみ
たい。そんな彼氏を困らせることしちゃ駄目って説教して返したわ。」

「

と、すこし疲れた顔をして答えた。

「それじゃ本当に痴話げんかじゃないですか？怪我って言つたつて
引っかけ傷があるぐらいだし。」

「引つかかれたのが顔だったから、辛いと思うわよ。」

芳形さんの言うとおりだ。女の子同士とはいえ顔傷つけられてるの
みたら普通は黙ってみてられない。

「あ、優奈ちゃん有難う。お礼は神ノ木君からおごってもらってね」

「はい、有難う御座います。こんなことでしたらいつでも呼んでく
ださいね」

え？今ので何かおごらないといけないのか・・・参ったなあ。

そこに、郡課長が入ってきた。

「捜査会議は明日だから、今日はもう帰って良いよ」

その言葉に僕は驚いた。「いやいや、捜査会議明日って・・・」

「今粟飯原君とテルさんが初動捜査手伝ってるから、それが終わる
のが夜中なの。それに明日寝過ごされたら適わないからね」

課長に帰るよういわれ、皆にお疲れ様でしたを行って上げることに
した。玄関を出たところで芳形さんに声かけられた。

「うち…どこ？」

「上馬。渋谷駅から田園都市線」

「あ、あたし東武線だから渋谷まで一緒だ。」

と言うことで駅まで一緒に歩くことになった。

「初日やってみてどう？」

芳形さんが尋ねた。どうって言われたって今日は女子高生の痴話喧
嘩のことしかやってない。本格的な捜査は明日からだ。

「まだ分からないですよ。何も捜査してないですから」

「普段はこんなもん刑事の仕事って、刑事部屋だって会社みたいで
しょ？よくテルさんにも言われるけど、刑事は書類書くのが主な仕
事よ」

「何か、想像してたのと違いますねえ。でも、明日から殺人事件の
捜査始まりますよね、楽しみなんですよ」

「そう…あまり期待しないほうが良いかもね、所轄のうちは。」

どういうことだが僕には分からない。芳形さんは続ける。

「殺人事件の捜査たくさんやるには捜査一課に行かないと。神ノ木

君はキャリアだからそのうちいけるんでしょ？」

それは確実とはいえない。芳形さんは捜査一課の現実を知らないのだろうか。

「捜査一課ってのはいわゆるノンキャリアの根城です。人事権も一課長が握っているんです。いくらキャリアでも位置課長に求められないと捜査一課にはいけません。」

「そうなんだ…私は今の仕事面白いから良いけど」

「芳形さんは…」

「ひかる」

「ああ…ひかるさんは何故刑事に？」

それを聞き出す前に電車が来てしまった。これ逃したら次は急行で停車しない。

「ひかるさん、お疲れ様でした」

「お疲れ様。又明日ね。」

こうして、僕の刑事としての初日が終わった。

幹部候補生の初出勤（後書き）

まあ、最初だからこんなもんでしょう。

次回は捜査会議です。いったいどんな仕事になるのでしょうか？

セルリアンタワー殺人事件 1 (前書き)

神ノ木、芳形両刑事が帰宅した後も初動捜査は続いていました。

今回は、栗飯原刑事視点です。

セルリアンタワー殺人事件 1

昨日発生したセルリアンタワー殺人事件の初動捜査が終わったのは夜中のことだった。テルさんが着替えを取りに帰路に着くのを見届けて、夜勤当番の俺は署に戻った。

12階の刑事課は電気は付いていたものもぬけの殻になっていた、恐らく皆仮眠室だろう。

ここに来て1年、まさか殺人事件が起きるとは…、クソ、眠れやしねえ。捜査一課にいたときは当たり前のようだったが、俺も平和ボケしたか。いや、眠れなかったのは過去に3回だけだったな。。。

最初は新潟の起捜にいた時だった。それまでも刑事だったとはいえ北海道の片田舎だったので大した事件も無かったせいもギャップが激しかったな…。見るもの全て新鮮でテンション上がりっぱなしで空回りしてた。そういえばはじめての殺人事件だっていうひかるも今日配属になった神ノ木ってキャリアも今頃眠れないでいやがるかもな……。

2回目は…新宿にいた時だったか、亜細亜街に踏み込んだ時俺ははじめて人を撃った。事件解決した夜に、これは極秘情報と言われ妻のメグにも言えず一人ベランダでタバコ吸いながら悶々としてた……。

そして3回目、忘れもしないあの事件。この渋谷西署管内で起きた殺人事件だ。俺は捜査一課の管理官として、特捜本部にいた。メグはこの所轄の刑事だった。マークシテイ付近を聞き込みしていたとき、メグが銃弾に倒れた。心臓を一発、即死だった。鑑識の結果、

追っていた被疑者の弾丸と一致した。しかし警察官服務規程では身内が被害者の場合は捜査を外れなければならないとあり、当然俺は捜査から外された。結局被疑者は見つからず特捜本部は解散。普通なら大幅な降格人事なのだが俺はメグがいたこの所轄に転属願いを出し、半年後にここに赴任した。この事情を知っていたテルさんも歓迎してくれたっけな・・・。

そんなことを思い返していたら東の空が明るくなってきた。3時間ぐらいだが仮眠を取ることにした。

・・・

俺が目を覚ますと神ノ木とひかるがもう出勤していた。二人ともあまり寝れなかつたらしく朝からテンションが高い。

「今日、僕が刑事として華々しくデビューする日なんですねえ」

「ちよっと、緊張感ないわねえ全く！」

…やれやれだ。

第一回の捜査会議が始まるので、俺達は会議室に向かった。

セルリアンタワー殺人事件 1（後書き）

事件を解決したときに、刑事も傷つくことがあると聞いたことがあります。

今回はその触りの部分でした。

（若い刑事にはまだ無いたんこぶってやつです）

セルリアンタワー殺人事件 2（前書き）

さて、最初の捜査会議、そして捜査が始まります。

今回はひかるさん視点です。

セルリアンタワー殺人事件 2

あたしが刑事になって最初の殺人事件ということもあり、昨夜は殆ど寝られなかった。

昨日配属されたばかりの神ノ木君（上司だけど一応後輩だし）も朝からテンションが高い。

粟飯原係長に釣られ大会議室に入る、これもはじめてのこと。警務課の人たちが慌ただしく設営をしていた。

後方の席を見つけて陣取る。捜査一課の刑事たちがぞろぞろと入ってきている。

するとそこに、初老の刑事（？）がこつちにやってきた。

「おい粟飯原、久しいなあ。あの事件以来か…」

「そうですね…奴はまだ…」

あの事件というのは係長の奥さんが殉職した事件のこと、そのころあたしは本所署所属でスカイツリー前の交番勤務だった。被疑者が捕まってない為、検問で吾妻橋まで行っただけ……。

そんなことを思い出しているうちに、郡課長の司会で捜査会議が始まった。

「ええ〜それでは、第一回の捜査会議を始めます。まず最初にこの特捜本部の本部長になっていただく捜査一課の西塔課長より挨拶を賜ります」

さつき係長と話していた初老の刑事が立ち上がる。あらま、一課長

だったのね。。

「既に各方面に通達したとおり、昨日、セルリアンタワーにて殺人事件が起こった。被害者の名前は萱場邦夫、44歳。クラックスマネジメント代表取締役である。事件現場は社長室であった。」

横から神ノ木くんが話しかける。

「あのひと僕のおこななんです。課長の隣にいる、楠管理官。僕と同じ北大出身で、刑事として管理官の職を買って来たそうなんです。」

「ふ〜ん…キャリアなのに捜査一課に抜擢されるなんて、よっぽど現場主義なのね。」

管理官か…じゃあ実際にはあの人が捜査の指揮をとるってことか…

一課長の挨拶が終わり、マイクは管理官に向けられた。

「まず、現場の状況を報告してください」

「ハイ。被害者はナイフで喉元を一突きされ、即死の状態でした」「死亡推定時刻、一昨夜の午後23時から午前7時のあいだ、以上」

本庁の刑事が報告をしている。あ〜いうのあたしもやりたいなあ…
なんか刑事って感じがする。

「目撃者については？」という問いに、係長が立ち上がる。そういえばあたしたちが上がった時まだ捜査してたっけ。

「第一発見者は警備会社KEISOの警備員、小幡佳織。夜中の巡回中にドアが空いていたので、入室したところ死体を発見、他に目撃者の報告はありません。以上」

「被害者の家族については？」という問にテルさんが立ち上がる。
「被害者は3年前に妻と離婚、現在は自由が丘のマンションに一人で暮らしていた。妻との間に子どもが一人いるが、離婚して以来会ってない。今は、それだけだ」

「他に有力情報は…？…では、これより操作の割り振りを決めます。待機！」

第一回目の捜査会議はこんな感じだった。被害者の家族に聞き込み？警備会社？それとも会社周辺？

もうわくわくしてしょうがない。そう思うと笑顔がこぼれた。不謹慎よね…。

会議室を出て刑事課に戻る際に神ノ木くんがテルさんに話しかけた。

「動機はやっぱり怨恨ですかね…テルさんどう思います？？」

「不謹慎な野郎だな…楽しそうな顔しやがって。被害者亡くなってるんだぞ！」

あゝあ、怒られちゃった…

あれ？係長は…？廊下で本庁の刑事と話してるわ…多分割り振りの件かなあ…

セルリアンタワー殺人事件 2（後書き）

あゝあ、女性視点って難しいな。。。

ってかほとんど会話で終わっちゃった。。。

セルリアンタワー殺人事件 3 (前書き)

神ノ木刑事にとってはじめての捜査です。

というわけで今回は神ノ木君視点です。

セルリアンタワー殺人事件 3

捜査会議が終わり刑事課に戻ってきた僕はハッキリ言って地に足がつかない状態だった。

テルさんからは「不謹慎だ！」って怒られちゃったけど、捜査ができるうれしさからかな？

その反面、不安の方が大きいのも事実、あんまり最前線も怖いなくて。それはそれで今度は係長に怒られそうだ。

暫く捜査資料に目を通してしていると、郡課長が戻ってきた。

「え、捜査の割り振り決まりました。栗飯原君とテルさんは害者周辺の聞き込みお願いします」

お：聞き込みか…いよいよ刑事らしくなってきた。

「芳形君は捜査本部で情報要員」

どついう意味かと思ったらお留守番らしい。ひかるさんふくれっ面になってた。

「で、神ノ木君は管理官と目撃者のところに行つて」

「ええ？僕がですか？それなら僕じゃなくてひかるさんのほうが…」

これには驚いた。刑事になって二日目の僕が何故…

「管理官のご指名、キミの車に乗ってもらつから」

あ、要するに運転手ね…

「お偉いさんの相手ってまだ苦手なのよね、あたしじゃなくてよかった」

何？このひかるさんの変わり用は…思わず、

「ひかるさん酷い…」

って言っちゃった。

管理官が出発するというので僕は車を出して、管理官を後部座席に乗せて目撃者の会社に向かった。

警備会社KEISOは署から程遠くない高樹町。高速乗るまでもない。10分足らずで着いた。

受付で警察手帳を出す。

「警視庁捜査一課の楠です」

「渋谷西署の神ノ木です」

「今回の殺人事件の目撃者である小幡さんにお話を伺いたいです
が・・・」

応接室に入ると既に本庁の刑事が4名、目撃者を取り囲んでいた。

目撃者、小幡さんは見たところ60代半ば。小柄な女性だ。

「あなたのタイムカードを拝見すると死亡推定時刻はビル内にいた事になります。」

「他に目撃者がいないということはあなたは一人でビルにいたのですか？」

「犯人の侵入経路は、一般の人でも出入りできるような場所だったのですか？」

本庁の刑事は次々とまくし立てる。その刑事たちに管理官が一喝する。

「君達、いい加減にしたまえ！それでは取り調べではないか？」

刑事たちも反論する。

「しかし、他に目撃者がいないのです。犯人の可能性だってあるんです」

管理官も負けちゃいない。

「そうやすやすと犯人と決め付けるな！その証拠はどこにあるんだ！それにだ、私は他の目撃者を見つけることを命じたはずだ！こんなところで何をしている！」

これには言い返せない。そそくさとその場を退散していったんだけ

ど、いちばんうしろにいた刑事が吐き捨てた言葉を僕は聞き逃さなかつた。

「こんな甘つちよろいことで事件が解決するとても思っているのか、田舎者の小僧が…」

管理官は小幡さんに向き直って話を始めた。

「失礼いたしました。警視庁捜査一課の楠です。ゆっくりでかまいませんので事件のあったときのこと、話していただけますか？」
で、ようやく口を開いたかと思いきや…

「わたしやああの時はいつもの人が風で休んでて代理でいったんだよ。はじめての場所だから避難口とか搬入口とかを確認していたわけサ、あんな時間だから大体の会社のお部屋は鍵がかかっているわけよ。でも社長室だけは開いてたからおかしいなあと思って覗いたら人が寝てるじゃないのさ。呼んでも起きないから電気を付けたら喉から血が出るじゃないのさ。わたしやあ慌てたねえ、すぐ卓上の電話機から110番通報したってわけなのよ」

は…早口だ…

「それがなんなんだい、いまどきの刑事ってのは目撃しただけで犯人扱いするのかい？そりやあたしかに若い頃は武蔵野小町なんて言われてモテたもんよ。でも時つていうのは残酷ね、もう誰も見向きもしないじゃくあ w s e d r f t g y ふじこ 1 p」

愚痴になつてきちゃった。管理官を見たら眉間にシワが寄っちゃつてる…

ひと通り聞いたところで一礼をし、警備会社を後にした。

「結局、何の情報も得られませんでしたね…」

「まあな。しかし見たる、あの刑事たちを。本庁の刑事というだけでプライドばかり高く何をしてもいいと思っっている。何とかして自分の手柄にしようと必死なんだ。あれをキミに見せられただけでも良かった。これが刑事の現実なんだってな」

「そうだったんですか・・・それで僕を運転手に？」

「ああ、知っていると思うが捜査一課はノンキャリアの牙城だ。我々キャリアをよく思っていない連中もいる。嫌がらせも当然うけた。そんなことだから私が管理官になってから検挙率は下がる一方だ。だからな、警察機構を変えたいんだ。皆で協力しあって開かれた捜査をしたいんだ。」

管理官はキャリアとしての使命を持って管理官に志願したんだな。やっぱりすごいやこの人は。

「そう、ですか：昔の刑事ドラマで『正しいことをしたかったら、偉くなれ』であつた気がします」

管理官は頷きながらこう言った。

「その通りだ。組織を変えることは、中から変えていかないといけないんだ。それは我々キャリアの仕事だ。私はこのことを副総監から教わつた」

副総監：僕や管理官と同じ北大出身で、上まで上り詰めた人だ。僕はまだお会いしたことはない。管理官は続けた。

「君も北大出身だったな：東大閥はもはや都市伝説、我々で新しい警察を作っつていこう」

そう話しているうちに、警察署に到着。管理官は特捜本部へと向かい、僕は刑事課に戻つた。

セルリアンタワー殺人事件 3 (後書き)

警備員「マシンガン Took ったどっかで見ただことあるって言わないのっっ！」

しっかし長くなっただなあ…

セルリアンタワー殺人事件 4（前書き）

さて場面は変わり今度は怨恨の路線から捜査をして行きます。

今回は粟飯原刑事視点です。

セルリアンタワー殺人事件 4

捜査の割り振りが決まり、捜査本部に戻ると、今回コンビを組む本庁の刑事がやってきた。

「栗飯原さん、ご無沙汰しております。こうしてまた一緒に捜査できるなんて思ってもいませんでした」

コイツの名は、千堂尚樹せんだう なおき。去年の11月までこの強行犯係長だった男だ。

俺がここに転属したのとほぼ同時期に捜査一課へ転属になった。一緒にいた期間は僅か1ヶ月だ。

「強行犯係も大変ですねえ、4人と言う小所帯でそのうち二人は新人刑事ですか。私の知っている刑事はテルさんだけですから・・・」

「まあな・・・よくやって来れたもんだ。お前の転属、ベテランの定年と重なっちゃまったからなあ」

確かに俺がここに来てから殺人事件は初めてだ。あまり凶悪な事件も起こっていない（暴行等は数有るが殆どが未成年なので生安の担当になっていいるのもある）。だから本庁も補充を必要としていなかったのだろう。おかげで俺とテルさんはてんでこ舞いだ。しかしこの事件で補充を考えてくれるだろう。

すかさず俺は千堂に聞く。

「おい、クラツクスマネジメントについてなんか知ってるか？」

「ええ。今年の4月にこの副社長が突然辞任しているんですよ。」

IR情報にありました。理由は一身上の都合によるものと有りましたが、株主総会を待たずして辞任ってなんか怪しいと思いませんか？」

そのIR情報を見せてもらった。株主総会前に辞任だと？何か大きな不祥事を抱えていてそれをおつ被せたとか考えられんな。

「よし、その元副社長、米良大樹めら だいじゆに会いに行く。ヤサは分かっている

るのか？」

「北参道です」

「分かった、では俺の車で行くぞ」

して、俺は千堂を助手席に乗せ、明治通りを北上した。

北参道、閑静な住宅街で高級住宅が並んでいる。元副社長の家はすぐ分かった。

インターホンを鳴らすと夫人と思われる女性が出た。

「警視庁捜査一課の千堂です」

「渋谷西署の粟飯原です、ご主人にお話をお伺いしたいのですが？」

最初は渋っていたが、なんとか通してもらえた。玄関からリビングへは米良が案内してくれた。

千堂は話を始めた。

「米良大樹さんですね？クラックスマネジメントの副社長やられてた」

「ああ、そうだが。警察がいつたい私に何のようですか？それに渋谷西署は管轄違いじゃないか。」

いかにも不機嫌そうだが、それもそうだな。説明しないと分かってもらえない。俺が続けた。

「実はですね、ウチの管内で起きた殺人事件に付いて調べているんです。事件の被害者は萱場邦夫、貴方が勤めていたクラックスマネジメントの社長だった方です」

米良の目の色が変わった。

「なんと・・・萱場が・・・」

「何かご存知なんですか？」千堂が乗り出す。

「いやいや、萱場が社長になったのは今年の6月の株主総会でだ。

本来なら私と言う話であったが私ももう65だ。引き際が肝心だと思ってる・・・。引退させてもらったよ」

「しかし、4月に辞任と言うのはあまりにも不自然では有りませんか？」

「ああ、そうだな。こうするしか無かった。株主総会まで残っていたら私が社長になっていただろう。しかしな、これからあの会社は若返るところだったんだ……。老人たちの意見ばかりになってしまつては、若い力が発揮できない。今までそれで一流企業が倒産して行つた。私はそれを見たくなかったのだよ……。その矢先だったのに……。」

俺の刑事の勘として、この男はシロだ。クラックスマネジメントの経常利益は年々上がっている為引きずりおろす輩がいるとは思えない。

「引退した事に、後悔はしていませんか？」

俺のその問いに、葉巻に火をつけながら答える米良。

「ああ、今は余生を楽しむことにしているよ。カミさんにも苦労かけっぱなしだったからな。だがな、心残りが一つある。つい先月、管理職のリストラがあった。その管理職は40代後半〜50代だ。それを決めたのは萱場だ。萱場はまだ44歳。ヤツもまた、会社の若返りを実現させようとしていたのだろう」

千堂が深呼吸をして訪ねた。

「リストラされた社員、分かりますか？」

「ああ、分かるとも。この4名だ」

携帯のメモリーから名前を4名聞き出す事が出来た。

聞ける事は聞けたな。犯人の可能性が一番高いのはこの4人だ。

俺たちは礼を言つて、米良の自宅を後にした。

車に乗り込むまでの道のりで何かを感じていたのか俺に言つてきた。

「栗飯原さん、このリストラされた4名、犯人の可能性有りますか？」

「今の時点では充分あり得る、本部に戻り次第調査を始めよう。・
・それにだ。今回のリストラ、米良が引退したから起きた、と思う
ヤツもいるだろう。としたら次に狙われるのは米良だ。」
そう言うと、千堂は携帯を取り出し電話を始めた。

『警視庁捜査一課の千堂です。現在渋谷西署で起きている殺人事件
の犯人が北参道に現れるかもしれません。巡回を強化願います』
そうか、代々木署に応援要請出したな。

して、俺たちはリストラされた4名を当たることにした。

セルリアンタワー殺人事件 4（後書き）

捜査も佳境に入ってきました。

果たして、栗飯原刑事の読みは当たっているのでしょうか？

次回乞うご期待

セルリアンタワー殺人事件 5（前書き）

さあ、容疑者が絞られてきました。

今回は捜査本部で情報を集めているひかるさん視点です。

セルリアンタワー殺人事件 5

捜査本部に入ったのは初めてだったけどいろんな電話がかかってきて休む暇もない。

大きな事件となると中も大変ね…っていつているうちに新しい情報が入ってきた。

クラックスマネジメントは今年の6月に4名をリストラしている。

それも管理職相当を。

よっぽどの不祥事があったというのならまだしも、そうではないみたい。

本部の正面では楠管理官と神ノ木君がなにやら分厚い書類に目を通している。

この4名の情報をつかんだのは係長、それを元にテルさん達はその4名を探して外にいる。

しばらくして、神ノ木君がコーヒーを取りにやって来たので、聞いてみた。

「どう、進展あった？」

「いやあ、全然です。不祥事が見当たらないんです。今B/SとP/Lに目を通していたんですけどね、3年以内に意図不明なお金の動きが全くないんです」

「お金の動きに不自然なところはない、か…」

通常何かの裏取引とかが起きたとしたら経理上に矛盾点が出てくる。それが全く見当たらないってことは不祥事は起こしてないってことね……。係長から報告があったようにただのリストラだったのか

しら。

「何もないってことはリストラされたら逆恨みされて当然ね。」

「そんなもんですかねえ・・・」

「だってさ、なにか不祥事があってリストラってことになるそりゃあ少しは後ろめたいところもあるわけじゃない。管理職なんだから。」

神ノ木君も気づいたみたい。

「そうですねえ、会社に誠心誠意尽くしてきたのによって感じになりますもんね・・・」

その時、捜査本部に電話がかかってきた。

「はい、捜査本部」あたしが出ると、

「捜査一課の千堂だ。現在リストラされた4名を当たっているが、うち3名はアリバイ確認。管理官に報告してくれ。」

本庁の刑事からの報告だった。すぐさまあたしは正面に座っている管理官のところに行った。

「管理官。千堂刑事より4名のうち3名はアリバイが確認とれたそうです」

「そうか、後の一人はまだ報告が来ないか？」

「今のところ報告はありません」

もしかしたらその後一人で犯人決まり？でもまだ犯人と決まったわけじゃないのよね・・・

神ノ木くんが横でぼそつと、

「ローラー掛けますか？」

つてローラーって何？なんか巻きとるの？管理官も、

「一番容疑が濃いからな...ローラー掛けるか、捜査員の増員を課長にかけ合っ」

と言って携帯電話を取り出し、廊下へ出て行った。

あたしにはちんぷんかんぷんだつたので、神ノ木君に聞いてみた。

「あのさあ、ローラーって何？」

「犯人の目星がつかないときに関係者全員風潰しに当たることです。任意同行で引つ張るんです、その中に犯人がいるかも知れない。捜査員は相当数になりますが、確実なんです」

「なんで始めからやらないのよ！」

「それはですね、今捜査一課が受け持っている捜査本部が4つらしいんです。ローラーを掛けるっていうことは後の3つの事件の捜査を保留にしないといけない。そうになるとそっちの犯人が逃げてしまう。なのでなかなか踏み切れないんですよ」

そんな話をしていたら、テルさんが本部に戻ってきた。

「ローラーなんてする必要ねえよ。探してた最後の一人任意で連れしてきた。」

それに驚いたのは本庁の刑事。

「所轄がどうやって見つけたんだ!？」

「それがよ、うちの係長から電話があつてな、北参道に現れる可能性があるから行ってみて欲しいってな。で俺が行ったらその場所にいたわけよ。それでおとなしく任意で付いてきたんだな。逃げるかと思つたから、どうしようと思つたけどな」

そっかあ、さつき電話があつた刑事は係長と一緒にいた人だ。他の3人を当たつてたのね。

「栗飯原さんか…全くあの人には頭が上がらんな。」

という刑事さんに対し、あたしは聞いてみた。

「あのお…ウチの係長ご存知なんですか？」

「当たり前だ。栗飯原さんは前の管理官だ。俺は本庁の刑事としてのいろはを栗飯原さんから教わつた。他の刑事たちと違って捜査にあたる時に証拠が出るまでは犯人扱いしない。今年に入って新し

く来た刑事はそこを分かっているから困りもんだ」

「へえ…そうだったんですね、」

て。え？係長が管理官？捜査一課にいた事は知っていたけどまさか管理官だなんて・・・

「ひかるさん、さっきその『新しく来た刑事』ってのに会ったんですよ。もうすぐ犯人扱いするんだもん驚きましたよ」

「なあによそれ・・・プライドばかり高いのが集まったら問題ねえ」

なんて雑談してる場合じゃない。すぐさまあたしたちは12階の刑事課に向かった。

セルリアンタワー殺人事件 5 (後書き)

果たしてテルさんが連れてきた人は犯人なのでしょう？

セルリアンタワー殺人事件 6 (前書き)

さて、任意で連れてきた男の取り調べが始まります。

今回は栗飯原刑事視点です。

セルリアンタワー殺人事件 6

俺が予測していたとおり、副社長の米良のところに行ったらしい。所在がわからなからでもしやと思ひ速攻でテルさんに連絡を入れ、署まで連れてきてもらった。

俺たちが刑事課に戻ると取調室に本庁の刑事がいた。

入ろうとすると、刑事の一人に遮られた。

「警視殿、此処から先は捜査一課の役目です。所轄は待機願います」
さつきまでのはずれな捜査をしてたくせによく言っぜ。そのせいで年若な管理官に怒鳴られたって言うじゃないか。

俺も言い返す。

「あのなあ、あの男の目星をつけたのはこの俺だ。」

「その件に関してはご苦労さまでした、所轄の役目は終わりました」
「そうか貴様等、俺が捜査一課から離れた後に来た刑事だな？」

全く取り付く島もない…いつから捜査一課はこんなに腐っちゃったんだ。いや、所轄はおとなくしておくべきなのか？違うだろう、あいつら手柄だけ横取りしようって言うんだからどうしようもないな。

そんなことを思っていたら管理官と神ノ木が上がってきた。

「栗飯原警視、ご苦労さまでした」

「いやあ、俺じゃないよ。任意で引張ったのはテルさんだよ」

「聞いたら栗飯原さんが目星を付けていたと聞いたもんですから」

「次狙われるのは副社長だと思っつてな、代々木署に応援頼んでおいたんだ」

そんな会話を交わし、管理官は取調室へ。そそくさと出ていく腐った刑事たち。

「栗飯原さん、お願いします。神ノ木も立ち会え」

俺と神ノ木も一緒に取調室に入った。

管理官が話を始める。

「名前と職業、聞かせてもらえますか？」

「牛木真紀うしきまさのり、こないだまでクラックスマネジメントで管理本部長を
しております」

「あなたは、一昨夜の午後11時より午前7時のあいだ。どこで何を
してましたか？」

「・・・・・・・・」

牛木は答えようとしない。神ノ木が口を開いた。

「困りましたね、今貴方に萱場社長殺害の容疑がかかってるんですよ。答えてもらえないと犯人でことになっちゃいますよ。だから答えて欲しいんです。ね？牛木さん」

「・・・・・・・・」

それに対しても答えようとしない。管理官が続ける

「クラックスマネジメントは人に恨まれるようなことはしていない
はずです。B/SとP/Lを拝見させてもらいました。後ろめたい
物は全く見当たらなかったんですよ」

「当たり前です。前社長の意向で不正だけは絶対にするなというのが
企業理念でしたから」

やっと口を開いたか。怨恨路線はないと証言しているもんだな。

「あなたは、先日この会社をリストラされてますね？何故してその
ようなことに？」

「6月の株主総会で社長が変わりました。その社長の路線は『老兵
は去るべし』だったのです。私は社長より一回り上です。邪魔に思
えたんでしょうな？」

そこまでは米良に聞いていたとおりだ。しかし何故殺人なんかする
つもりだったのだろうか…。

管理官が話を続けていく。

「それで、リストラされた後はどうなさっていたのですか？」

「リストラされたなんて妻には恥ずかしくて言えません。入社時間から公園を渡り歩いて帰宅時間に帰る、そんな毎日でした。しかもう私の手持ちのお金が少なくなりまして。退職金を前借りしようとして社長を尋ねたのです。しかし、聞き入れてもらえませんでした。」

「それが23時過ぎだったと」

「ええ、社長は週になんか以下泊まりこみで作業をしておりますからだれもない時間に伺ったのです。他の社員の顔色もありますからね。」

このままではのれんに腕押しだ。変わって俺が質問する。

「そういえば、何故副社長のところへ行った？副社長も殺すつもりじゃなかったのか！？」

少々強めに出た。

「そんなつもりはない！私は副社長には手紙を託しただけだ！あの方を殺すわけがないじゃないか！？」

「その手紙の内容は！？」

「私の遺書だ！私は取り返しの付かないことをしてしまった。それを副社長に詫びる・・・」

ここまで言ったところで牛木は絶句した。

「取り返しの付かないこと…それは社長の殺害ですね？」

管理官が冷静に問いたです。

「はい・・・そうです。殺すつもりはなかったのですが…」

容疑を認めた。

「牛木真紀、殺人の容疑で緊急逮捕する。神ノ木、手錠をかける」

管理官がそう言うのと神ノ木があたふたしながら手錠をかけた。

その後、身柄は東京検察庁に送検され、特捜本部は解散した。

時計を見ると19時を回っていた。久々の殺人事件だったとはいえ

こんなにすんなり片付くとはな・・・

俺にとつてはそうだったかもしれないが神ノ木にとつては目の回る一日であつたに違いない。

そうしているうちに署長が入ってきた。

「粟飯原くん、この度刑事を1名増員することになった。明日から来る」

そっか、たった4人でこの管内はきついからな…

「あ、ありがとうございます。今回はすんなり片付きましたけど、いつもそうとは限らないので恩に着ます」

「今度のは新人刑事ではないので大丈夫だろう、よろしく頼む」
そう言つと署長は自室に戻つていった。

よし、今日は上がるとしよう。

セルリアンタワー殺人事件 6（後書き）

最初の事件が解決しました。

この先1名増員され刑事たちは明日を迎えます。

道玄坂の暗雲 1 (前書き)

殺人事件が解決し、渋谷西警察署は日常に戻りました。

今回は神ノ木刑事視点です。

道玄坂の暗雲 1

事件解決後、僕は家に帰ってボタンQだった。係長はこんな序の口だなんて言ってたけど、刑事って仕事大変だなあ…。ってヤバい遅刻じゃん、僕は慌てて家を後にした。

ぎりぎりの時間で刑事課に入ると、郡課長が人を連れて僕達のところにやってきた。

「え、ちよつと聞いてくれ。強行犯係にもう一人刑事を配属させることになった。羽根田警部補だ。強行犯係長をやってもらう。だが慣れるまでは代理だ。え、こちらから、栗飯原警視…」
係長はタバコを持った手を上げた。

「そして、耀巡查部長…」
テルさんは新聞から目を離さない。

「芳形巡查…」

「よろしくお願いします」

ひかるさんはたって挨拶。そして僕の方を叩き、

「こちらは神ノ木警部補」

「よろしくお願いします」

僕もたって挨拶した。席は僕の向かい側になった。早速係長（は羽根田さんだから今度から課長代理って呼ぼう）のところに行って話をしている。

「今までこれだけの人員でやってたんですか？」

「ああ、異動に定年退職が重なっちゃってね…」

課長代理の口調が少し重い、それもそのはず、それに殉職も重なったんだから……。

「そうですか、あの神ノ木さんって若い刑事、彼、警部補なんですか？」

「ああ、キャリア組だ。しかしキャリアであろうと後輩は後輩。そ

こはわかるな？」

「ええ、警察の現場知ってもらって俺達のために偉くなってもらわないと」

え？僕のこと話してる？

「でもな、昨日まであった殺人事件の被疑者逮捕したのこいつだからな」

すかさず僕はさえぎる

「ちょっと待ってください、あれは課長代理が見つけてテルさんが連れてきたから…」

「たしかにそうだ。でも手錠をかけたのはお前だろう？」

確かにそうだけど…楠管理官のサポートがなかったらどうなったか。羽根田係長代理も、

「え？そうなの？もつと自信持っていていいんじゃないか？」だってさ。まあでも、刑事としての自信ってこういう所から付くのかなって正直思った事件だった。

その時、パンツスーツのスラっとした女性が刑事課に入ってくるなり、

「栗飯原〜」

って言いながらこっちに来た。

「栗飯原お願い、今日管内パトロールするんだけど、誰か貸してくれない？今うち一人口スに研修行ってるから人足りないのよ」

生活安全課も大変だなあ…若者の街だからパトロールは必須なんだろうけど。

「俺は嫌だよ。ガキの相手なんざごめんだ」

テルさんはびしゃり。するとその女性は、

「ところがどっこい今回の目的は大人なんですなえ〜！ってことで…ひかるちゃんにはいつも手伝ってもらってるから…そうだ！このボーヤ借りていい？」

え？僕？いくらなんでもそりゃないだろ…。しかし課長代理は、

「まあ、今大した事件ないから神ノ木行って来い！刑事の現場は捜査だけじゃない、これもひとつの勉強だ」

「交渉成立、神ノ木君だっけ？あたしについてきて」

とまあ、手を引かれて一つ下の階、生活安全課へと向かった。

生活安全課は部屋の雰囲気は刑事課と同じ、ただ違うのはスーツ姿の人が一人もいないことぐらいかな？

「課長！強行犯係から一人借りてきましたあ」

と一番奥にいる課長にその女性は報告。え？郡課長？どうして？

「ああご苦労さん…ってなんで神ノ木君なんだ！彼はキャリアだぞ、何かあったらどうするつもりなんだ？」

そりゃ課長も驚くわな…僕も驚いたけど。

「それが、栗飯原が何事も勉強だって。大丈夫ですよ、あたしのサポートしてもらうだけですから」

「依藤君、くれぐれも危険のないようにな！」

そう言って課長はゴルフクラブを磨き始めた。

「あ、自己紹介遅れた。あたしは生活安全課の依藤よりぶじ、神ノ木君だっけ？今聴いたと思うけど、今日から暫くあたしのサポートしてもらうから。さ、行くよ」

と言われ依藤さんのアルファロメオに乗り込んだ。

車中聞きたいことがあったので聞いてみた。

「あの、郡課長って生活安全課の課長もやってるんですか？」

「そう、兼任。ウチの管内刑事課と生活安全課で職務が被ることが多いのよ。だから各課に課長代理がいるでしょ？あたしがうちの課長代理、そっちの課長代理は栗飯原」

なるほどなあ、少年犯罪やら薬物が絡んでいたりするとそうなるよなあ…ちよつとまてよ…

「あの、今栗飯原って言いましたよね？そんなに親しい関係なんで

すか？」

「え…？ああ、栗飯原は大学と大学院の同級生。警察大学校も同期。一応あたしら準キャリアなのよね。普通一つの所轄に二人いるなんて無いから珍しい現場みたわね」

そういう事が：鬼の栗飯原に対してずいぶん馴れ馴れしい人だなあ。って思ったけどそんな裏があつたのか。

そんな話をしているうちに渋谷109前についた。

「今この時間センター街歩行者天国だから歩いて行くよ」とのこと、駐車場に車を止めて歩くことにした。

道玄坂の暗雲 1 (後書き)

生活安全課に手伝いで借り出されてしまいました。

道玄坂の暗雲 2 (前書き)

神ノ木君が生活安全課に借り出されてからの署内です。

今回はひかるさん視点です。

道玄坂の暗雲 2

神ノ木君が依藤さんに連れ出されてから暫く書類を書いていた。殺人事件の疲れはあまりないけど、つまらないなあ。。。

なんて考えていたところに佐波さんが入ってきた。

「すみませ〜ん、うちの姉御見ませんでしたかあ？」

佐波さんが素つ頓狂な声で聞いたものであたしは、

「何ですかその抜けた声は・・・依藤さんなら神ノ木君とパトロール行きましたよ」

「え〜困ったなあ、カラーギャングの一斉摘発するって言ってたのに・・・」

確か、依藤さんがここに来たのもそれでじゃなかったっけ・・・で、神ノ木君つれてっちゃったのよねえ・・・まさかその場所にいなかったから課長に大目玉喰らったのかしら。

すかさず羽根田さんが訪ねた。

「で、佐波君はそんな時に部屋をうるついでんのかい？」

佐波さんはあわてて、

「違いますって、今回摘発する連中・・・去年の殺人事件に絡んでいるかもしれないんです」

「去年の殺人事件って・・・まさか・・・課長代理！」

栗飯原課長代理がさつと顔色を変える。そして、

「おい佐波！どういう事だ！？説明しろ！」

課長代理が詰め寄る。無理も無い。被害者は奥さんだったんだから。「はい、百件店には数件のクラブがあります。その中で覚せい剤で検挙した店がありました。その中の男が言ったんです。『俺は去年の婦警殺しの犯人知ってる』って」

「そいつは今どこだ！」

「本店の薬物対策課が連れてつちやいましたよ」

あらま、聞き出せるチャンスだったのに身柄を本店に持ってかれたのね……。これじゃどうしようも無い……

「どうして俺に報告しなかった」

係長はイライラしている。テルさんも怪訝な顔をして佐波さんに訪ねた。

「お前さんよ、この管内で起きた事件の事、知らなかった訳じゃねえだろ？」

佐波さんは申し訳なさそうに、

「ええ、しかし本店の刑事が姉御と栗飯原さんには言うなって……。でも俺はこの刑事です、一応。だからそれとなしに伝えようかとしたら姉御がいなくなっちゃって……。」

もう慌てちゃってる、そこに羽根田さんがなだめるように、

「ふ〜ん……。そんな事があったんだ……。ねえ課長代理、何か掴めるかもしれませんよ、生安の手伝い、変わっても良いんじゃないですか？」

つて行つた矢先に栗飯原さんは電話の受話器を挙げてダイヤルをした。

「美果、栗飯原だ。そつちがひと区切り付いたら神ノ木を署に戻してくれ。そこは俺が変わる。事情は後で説明する」

栗飯原さんが留守電を入れた。それにあたしと佐波さんは慌てた。だって、被害者が身内なら捜査しちや行けないって……。でも栗飯原さんは乗り気だ。

「いいか？今の佐波の話、俺は聞かなかつた事にしてくれ。本来覚せい剤は我々の仕事ではない。俺が向かうのはあくまで生安の手伝

いだ。そう言う事だな羽根田？」

「ええ、これなら合法的に捜査が出来ます」

おお、羽根田さん頭がいい・・・思わず感心しちゃった。

「じゃ、そう言う事で。僕は何も言いませんでしたから
って言うて佐波さんは戻って行った。」

道玄坂の暗雲 2 (後書き)

まさかの展開、これで物語は終わっちゃったのか？

いやもうちょっとだけ続きます。

道玄坂の暗雲 3 (前書き)

さて、パトロールに向かった二人はどうしていたのでしょうか？

今回は、神ノ木君視点です。

日曜日ということもあってセンター街はごった返していた。

「依藤さん、ここはいつもこんな感じなんですか？」

「そうよ、今日はまたすいてるほうかも。夏休みあたりは身動き取れないのよ」

そんなこんなで依藤さんを追いかけていたらファーストフード店の前で立ち止まった。

「依藤さ〜ん、さっき面白い話聞いたんだけど〜」

ぱつと振り向いたら女子高生が3人こっちに來た、いったい何をする気なんだ？

「あらああなたたち今日も來てたの？中間試験前じゃないの？」

依藤さんも慣れたもんだ。学校の試験期間まで把握しちゃってる。

「まだ2週間後だから大丈夫！でねでね、面白い話っていうのは、昨日からドンキの前当たりで最近騒いでる奴がいるのよ。そいつら

『気合い！』って言って暴れ回ってるって。同じ色のカツコして。」

「そのどこが面白い話よ！ちゃんとおまわりさんには言ったの？」

「誰かが通報してくれたみたい、何人かおまわりさんが來ただけどそれから3時間ぐらいもめてたなあ……。」

「……僕もそんな光景見た事があるなあ、学生時代狸小路で飲んでたら冬場にそんなのがいたなあ。違うと思うけど一応聞いてみた。」

「ねえ依藤さん、東京にも徒歩暴走族っているんですか？」

「何その徒歩暴走族って？最近若い子たちにはやっているのかしら、あなたたち知ってる？」

依藤さんは女子高生に尋ねる。

「しらな〜い、『徒歩』なのに『暴走族』ってありえなくね？って

か依藤さんコイツダレ？」

「ああ、先週から配属された刑事課の神ノ木君。今日はあたしのお手伝い」

「エエマジ？」

「刑事に見えないんですけどお」

「どう見てもお坊ちゃんだよねえ……。」

「……ああ、言われ放題だ……だから佐波さんここに来るのいやがるんだなあ……。」

「しよーがない。警察手帳を見せて黙らせるか。」

「本当に刑事です。渋谷西署刑事課強行犯係の神ノ木です！」

「あ……ガチ刑事だったんだ……。」

「え……警部補？」

「やばーい、ウチら捕まっちゃうんじゃない？」

「逆効果だった……。依藤さんに突っ込まれる

「あんたいきなり警察手帳は無いでしょ？この子たちは被疑者じゃないの！」

「す……すいません」

「やーい、怒られてやんのー」

全く最近の女子高生は口が減らないなあ……

「つてかさあ、神ノ木さんってクラブとか行った事ある？」

「いや、東京来て半年たつけどないなあ」

「最近、よくない噂あんだよね。ウチらはやってないけど、覚せい剤の温床になってるって」

「そうそう、先週も1件検挙されてた。でもあんなの氷山の一角なんだって？」

「ちよつとまで、渋谷ってそんな恐ろしい街だったのか？」

「覚せい剤……？依藤さん！」

「警察が覚せい剤でおびえてるんじゃないの！こういう情報を得る為にウチの刑事はこうやってパトロールしてるんだから……。」

そういう話しているうちに、キャバクラの客引きっぽいのが僕に近づいてきた。

「あの〜、警察の方ですか？」

「ああ、そうだけど？」

「なんか近くの店最近おかしいんですよね……。したにボディガードみたいなのつけてお客さんを脅しているというか……。何が行われているのでしょうか？」

「ボディガード付けてがっちり？なんか怪しいですね。その店の名前教えてもらえますか？」

「道玄坂にあります New Club Mule です。」

「分かりました、ご協力感謝します」

「依藤さん、こっちに情報が入りました。道玄坂のMuleで怪しい動きがあるって、後で行ってみましょう。」

「あたしはやあよ。後で佐波に行かせる。あ、ちょっと待って、署から留守電だ」

……

暫く待つてると課長代理がこっちに来た。

「おう、神ノ木、ご苦労だったな。お前は戻っていいぞ、後は俺がやる」

「係長、いったいどうしたんですか……。」

「いやあ、いつも皆に手伝わせて俺が動かないものなんだと思ってな」

係長が変わってくれるというので僕は署に戻る事にした。

道玄坂の暗雲 3 (後書き)

さて、栗飯原刑事と依藤刑事が合流。
どんな結果になるのでしょうか？

道玄坂の暗雲 4 (前書き)

さて、神ノ木君を署に返し、課長代理がやってきました。

今回は、栗飯原さん視点です。

道玄坂の暗雲 4

俺が署を出て美果たちのところに付いた時にはもう夕方になっていた。

クラブに行くといっているので俺は革ジャンにジーンズ、ワークブーツという出で立ちだ。

神ノ木を署に戻し、俺たちはタバコの吸えるファーストフード店に入り、事情を説明した。

「えええ！佐波がそんな事を・・・それで、粟飯原が出てきた訳か」「簡単に言つとそう言う事だ、だがあくまで俺は生安の手伝いってことで。いいな？」

「そう言う理由なら異存はないわ。で、佐波はどこ行ったのよ」

「別件で通報があつたらしい、キャバクラらしいがその内偵の準備をしている」

「ああ、その情報得たの神ノ木君よ。パトロール中にたれ込みあつた」

「・・・こつちは準備できてる。そろそろ時間だ。行くか」

俺たちは東急本店を抜け、クラブ街へ向かった。ココは特異な街で、クラブの裏にはホテル街がある。

歴史は随分古いらしいがなにぶん俺の生まれる前の話だ。よくは分からん。

今日のターゲットは古くからあるクラブ、「Club AXEA」。

俺が学生の頃からあるクラブだ。

以前友人と何度か来た事があつたが、当時は楽しかったんだろうな。ここはクラブスペースの手前がオープンカフェになっている。そこで張り込むことにした。

「おい美果、本当にここがターゲットになつているのか？」

「たれ込みあつた、本店も目をつけてるみたい。ここあたし学生時代通つてたから信じがたいけど。あんた覚えてないの？」

「そうだ、大学の同級生と来た時、確か美果もいた。」

午後7時、客がクラブスペースに入り出した。今のところ怪しい客はいない。そこに、初老の男性が近づいてきた。

「いらつしゃいませ、渋谷西署の刑事さん達がどのようなご用件で？」

「！！俺たちのことを知っているのか？したら美果が話し出した。」

「あ、こんばんわマスター」

マスターだと？この店の経営者つてことか。美果に話しかけた。

「最近ウチらでも悪い噂が多くてねえ、こないだあそこが摘発されたでしょう。その風評被害つてやつでさ」

確かに、いつもより客入りが1割ほど少ない気がする。あの事件は大掛かりだったからなあ・・・

そのせいだろうか、それとも日曜だからかは分からないが、今日営業しているクラブはここだけだ。

「ああ、あれは本店が騒ぎなの・・・。バカの一つ覚えみたいにローラー掛けるから」

そう言えば、今年の春に薬物対策課の管理官が変わつたとか言つてたな。その影響か？

暫く話していると美果が突然俺に振つた。

「粟飯原、中に入れてくれるって。あたし着替えてくるからちよつと待ってて」

着替え？そうか、パンツスーツで入ったら目立つもんな。

ジーンズに着替えて戻ってきた美果と中に入り、DJブースに案内された。

「おい美果、ここで何をやる気だ？」

「何って・・・張り込み。ここが一番見通せるのよ」

「そうか・・・そうだな。しかし今の機材は随分変わったなあ。どうやって動かすんだ？」

「そりゃそうよ、あれから20年も経ってるんだもん。あんたこういうの好きだったもんねえ」

そう言えば、普通クラブに来ると言えばナンパ目的が普通なのだが俺はプレイヤーが気に入りDJまがいの事をしていた。

ターンテーブルを回していると、DJが声をかけてきた。

「あ、刑事さん。DJに興味有り？」

「いや・・・20年ほど前に数回いじっただけだが・・・」

「20年前？マジっすか？大先輩じゃないっすか？俺、DJ・モリムラって言います。刑事さんは？」

「渋谷西署の栗飯原だ、宜しく」俺たちはがっちり握手をした。

イベントが始まり、モリムラのDJで音楽が掛かりフロアでは客が踊っている。

俺と美果はその両脇で怪しい奴がいないかを見張っている。このクラブにVIPルームはない。数年前、このクラブが摘発された時にそこが覚せい剤の温床になっていたというので取り壊してフロアを拡張したそうだ。

チークタイムになったのを見計らって俺はタバコに火をつけ、美果に話しかけた。

「おい美果、本当にここに現れるのか？」

「今日やってるクラブはここだけ、最近見ないお客さんが増えたってことで怪しい奴見たって通報があったのよ」

モリムラが話に割り込む

「その通報したの、俺っす。トイレの方で喧嘩なんか知らないけどしょっちゅうなんか起きるんすよねえ。変な事に巻き込まれなきゃいいけど。」

「トイレで覚せい剤を強要するって手もあるみたいね・・・」

なるほどな、摘発されたから別の場所に動いたって事が。
俺たちは監視を続ける事にした。

道玄坂の暗雲 4 (後書き)

ちよつと長くなりそうなので2つに分けます。

道玄坂の暗雲 5 (前書き)

Club AXEAでの張り込みの続きです。

今回も粟飯原さん視点です。

道玄坂の暗雲 5

club AXEAにて張り込みを続ける俺と美果。見た所変な客はフロア内にはいなさそうだ。

するとモリムラが俺に話しかけてきた。

「栗飯原さん、DJやってみます?」

何だと? DJは確かに学生時代遊びでやった事がある。しかもこのクラブでだ。

しかし当時の機器とは勝手が違って全てデジタル化されている。分かったもんじゃない。

美果も乗り出す。

「あら、あんたやってたじゃないここで。それに、ただ突っ立つてるだけじゃおかしいわよ。自分が張り込みの刑事ですって言うてるようなもんじゃない。」

何を言い出すかと思えば・・・俺はまさにその、『張り込みの刑事』だぞ。しかしそれで逃げられたら洒落にならない。俺はモリムラにレクチャーを受け、ターンテーブルの前に立った。

「Yeah! ここでDJの交代だ! 20年ぶりの復活! DJ A I H A R A ! ! !」

モリムラが叫ぶ、フロアを見ると俺を見て歓声を上げている・・・もう後戻りは出来ないぞ・・・

曲は昔俺がよくかけていた、kangarooの”promise”を選ぶ。しかしよくこの音源持ってたな・・・

「では、俺の青春の曲で盛り上がってくれ!」

もうこういうしかない・・・なんとか盛り上がってくれてるからいいものの、正直不安だ。

曲が終盤に差し掛かった時、トイレの方で血を流している女性を見。金髪の男に暴行を受けているようだ。。。

「おいモリムラ、ちょっとDJ変われ！」

「いったいどうしたんですか??」

「トイレで女性が暴行を受けている」

「というや否や俺はブースを飛び越え金髪の男をフロアに引っ張り出した。」

「キヤーーーーー」

悲鳴を上げ散り散りになる客。俺は中段回し蹴りを脇腹にヒットさせ押さえ込んだ。

金髪の男は興奮して叫んできた。

「何だデメエはあああつ」

俺は渾身の一言。

「警察だあああつ」

男をうつぶせにして手錠をはめる。

「え……うそお……」

「あのDJ警察だったんだ……」

「そう言えば最近何かあるって言ってたよね……」

そんな声が口々に聞こえたとき、DJブースにいた美果は客に向かって一言。

「ここは警察官立寄所ですから安心です。今ちよつとお騒がせしましたが、この後も大いにお楽しみください!!」

そう言いながら怪我をしている女性の方に向かい、外に連れ出す。俺も手錠をかけた男を連れ出し地域課の車に乗せて署に戻った。

「あ、栗飯原あ、今回ののは暴行事件だから、そっちに任せるわ。あ

たしは怪我した女の子送ってく」

美果を見送ってから俺と男は刑事課の取調室へ向かった。取り調べの最中に奴のポケットから覚せい剤が出てきた。それで暴行してやがったんだな。

1年前の事件と絡みがあると思いつめたが、その当時奴は名古屋にいた事が確認とれた。

殺人事件とは関係なさそうなので、早々に送検する事にした。警務課に引き渡し留置場へぶち込んだ。

刑事課のフロアに戻ったら、当直であるはずの羽根田がない……一体どこ言ったんだ？

俺は羽根田に連絡を入れた。

『はい、こちら羽根田』

「栗飯原だ。お前今どこにいるんだ？」

『神ノ木君と、昼間通報があったミュールに向かっています』

「よし分かった。俺はもう引き上げるが何かあったら携帯に飛ばし
てくれ」

『はい、お疲れさまでした』

気がついたら23時を回っていた。俺は引き上げる事にした。

道玄坂の暗雲 5 (後書き)

クラブでの事件は小さな事件で済んだようです。

ミュールの方はどうでしょうか？

道玄坂の暗雲 6 (前書き)

ニューヨーク ミュールに向かった羽根田刑事と神ノ木君。
通報があったため向かっています。

今回は、神ノ木君視点です

道玄坂の暗雲 6

課長代理と交代で署に戻った僕は、今度は羽根田係長代理と一緒に動く事に。

場所はさっき僕が通報を受けた「ミュール」というニューヨーククラブ。

「何かあったら絶対しょっぴいてやる。裏が絶対あるからな、こういう店は」

どうやら羽根田さんはニューヨーククラブが嫌いらしい。

「どーしたんですか？そんなに息巻いて」
僕は訪ねてみた。

「あのね、ニューヨーククラブなんて言っているけど所詮はキャバクラだ。」

「え？ミュールってキャバクラなんですか？すすきのに沢山ありましたけど僕は行ったことないです。」

そう、ニューヨーククラブとキャバクラじゃ意味が全然違う。僕は続けた

「キャバクラって言ったら、オサワリが出来るあれですよね？」

「え？違うよ。キャバクラって言うのは、ただ女の子が隣に座るだけだよ。」

「そうなんですかあ？それじゃあ詐欺じゃないですか？」

「何が？」

「女の子が隣に座るだけだったらニューヨーククラブですよ。成人式の日に行きました。」

「そうなのか・・・神ノ木君は出身どこ？」

「生まれは北海道の森町で、大学時代は札幌にいました」

「ああ、なるほど。北海道とこっちは呼び方が違うのさ」

「そうなんだ・・・じゃあ僕の知ってるキャバクラは東京ではなんて言うんだ？」

「そう思いながら僕らは、ミュールに到着した。」

通報通り、黒服の男がエレベーター前で張っていた。

羽根田さんが切り出す。

「あの〜ミユールってここでしょうか？」

すると、黒服が訪ねてきた。

「ええ・・・そうですが、どなた様かのご紹介でしょうか？」

「いえ、そう言うのは無いのですが・・・。一応こういふもんでして」

そついうと羽根田さんが警察手帳を見せた。

「渋谷西署の羽根田と言います。」

僕も慌てて警察手帳を出す。

「同じく渋谷西署の神ノ木です」

すると階段から別の黒服が出てきて僕に襲いかかってきた。

「警察が何のようだあ！」

手には鉄パイプを持っている。僕はすかさず持っていた特殊警棒で応戦した。

小手で鉄パイプを落とし、返し胴で鎮めた。。。警察大学校で学んだ剣道が役に立った。

ふと羽根田さんの方を見ると既に相手は気絶していた。

「一応俺、少林寺拳法四段だから」

へえ・・・外神田署の事件の時取り押さえたのは聞いていたけど、ここまで鮮やかだったんだな。

「じゃあ神ノ木君、入らせてもらおう」

エレベーターで4階へ、ミユールの店内に入る。

「いらっしやませ」

店長らしい黒服が声をかけてきた。僕は訪ねてみた

「あの〜、したにいた人たち、倒れているんで手当てしてあげた方

「がいいですよ」

「え？あいつらが？またウチに嫌がらせしているのか・・・最近工レベーターの前でウチに来て頂けるお客様を妨害しているんです。おかげで商売にならなくて・・・いったいどなたが・・・。」

僕が警察手帳を出そうとしたら、羽根田さんが静止して言った。

「いやあ、いきなり襲いかかってきたからぶっ倒しましたよ、奴ら当分はこないと思いますよ」

「そうですか、あなた達が・・・ありがとうございます。今回1セツトだけサービスさせて頂きます、ご指名はございますか？」

「いえ、今回初めてなもので・・・。」

「かしこまりました。フリー2名様ご来店です」

僕たちは席に通された。しばらくして女の子が二人。「梓」って子と「アンナ」って子。

僕の隣に梓が、羽根田さんの隣にアンナが付いた。

アンナが羽根田さんに聞いてきた。

「おにいさん達、仕事何してるの？」

「え？僕ら？ITの下請けやってるよ。今日はコイツの歓迎会」

と言いながら僕に目配せする。そうか、刑事だとバレたら捜査しにくい。僕も合わせる事にした。

「え・・・ええ。そうなんです。半年前に北海道から出てきて、今の職場にお世話になってます」

したら梓が驚きながら

「ええええ、北海道なんですかあ？あたしも北海道なんです。去年の春にこつちに来ました。室蘭の短大を出て、今専門学校に通ってます。」

え？僕より年下だったんだ・・・まあ、不思議ではないな。

羽根田さんが僕に尋ねてきた。

「神ノ木君、この町は皆が夢を持ってやってくる。そんな町なんだ。表向きは凄く華やかだよな?」

「ええ・・・そうですねえ、正直驚きました。すすきのも凄かったけどここはもつとですね?」

「そうだろう、そうだろう、でも、犯罪も多いんだよね。パトロールしている警官多いでしょ?」

「まあ・・・そうですねえ、ドンキの前に徒歩暴走族みたいなのが出たみたいですし」

こんな話をしていると、アンナが話しかけてきた。

「そうそう、去年この辺で殺人事件が起きたのよ、知らないと思うけど」

知らない訳が無い。ウチの管内で起きた事件だ。しかし、今は僕はIT関係(?らしいので話を合わせる事にした。羽根田さんも話を合わせに行っている。

「ああ、知ってる知ってる。新聞で見たよ。僕あの時秋葉原にいたんだけどさ、大騒ぎだったもん」

なるほど、外神田署管内でも何かやってたんだな・・・。

アンナは続ける。

「あの事件の後、ウチの女の子が一人飛んだのよね。」
僕が逆に訪ねた。

「飛んだ?ってどういう事ですか?」

「突然やめちゃったって事。ハルって名前なんだけどさ、こないだ潰れたクラブによく行ってたみたい。本名は知らない。」

梓が何かを思い出したように

「それ聞いた事あります、殺人事件の前後にいなくなっちゃって。女の子が飛ぶってキャバクラではよくある事だから通報はしなかったみたいだけ」

羽根田さんが女の子達に尋ねた。

「へえ、じゃあ連絡付かないんだ」

「うん、携帯番号変えちゃったみたい。お客も変なのが多かったからあたしとしてはせいせいしてるけど」

僕も納得しながら

「しかもその殺人事件の犯人は捕まっていないか・・・なんだか怖い話ですね。搜索願とかは出してないんですか？」

「出す訳無いじゃん。それに、刺青14カ所も入っているからすぐ分かるでしょ？」

刺青が14カ所・・・これは尋常じゃないな。羽根田さんも驚いている

「刺青が14カ所もあるの？よく働けたねえ」

「あたしも変だとは思いましたよ。でも、よくわかんない」

時間が来たというので、女の子のドリンク代を割り勘し、店を後にした。

僕はぼつりとつぶやく

「思いがけない収穫でしたね・・・あの事件に絡んでいるかもしれないなんて」

これには羽根田さんも納得している。

「まあまだきまった訳ではないし、搜索願も出ていない。捜すのはこんなんだろうな。一応明日報告入れよう。僕は当直だから署に戻るよ。君はどうする？」

「まだ電車ありますから帰ります。明日は僕非番ですので報告お願いいたします」

「分かった。大きな事件だと呼び出すから携帯は切らないでよ、それじゃお疲れ」

羽根田さんと別れて僕は帰路についた。

道玄坂の暗雲 6 (後書き)

1年前の事件とミユールのハル。

何かつながりがあるのでしょいか？

お話はもうちょっと続きます。

渋谷の九龍城砦 1 (前書き)

ミュールのハルの情報を経て3ヶ月。世の中はクリスマスだ年末だと慌てふためいている警視庁管内。今度は外国人が相手となります。

今回は楠管理官視点です。

渋谷の九龍城砦 1

町田東署の殺人事件の主犯を送検し、私は警視庁に戻ってきた。被疑者は中国人だったのだが、妙なことを言っていた。

『ガウロンセン
九龍城』

九龍城砦といえは、香港にあつた場所で何十年も前に取り壊されたはずではなかったか？

インターネットで調べてみると渋谷に通称としてそう言われている場所がある事が分かった。

地上11階、地下1階建てで住人が殆どが中国人。それっぽいテナントも多く入っているとのこと。

15年ほど前に新宿の亜細亜街が警察によって壊滅。それにより流れている者が住み着いたのが始まりと言われている。

その時の捜査資料を調べる為に、資料室に私は今いる。

『亜細亜街壊滅概要』という資料に目を通した。

正確には今から15年前の11月初旬、新宿中央署の刑事によって行われている。

目的はマフィアの摘発。警視庁刑事部長の命によって大掛かりな捜査だったようだ。

1ヶ月に渡る捜査の結果、マフィアの一員『さい・よんずん』を射殺。その他の構成員は強制送還となった。

そうか、それで町田や上野、そして渋谷に散り散りになった訳だな。で、町田で殺人事件が起きたので次ぎに奴らが向かうのは渋谷になる可能性は高いな。。。渋谷西署の管轄だな。

蔡永昇を射殺した警察官は。。。新宿中央署 刑事課暴力犯係、粟飯原吏輝警部補。。。。

何だと？栗飯原吏輝と言えば、渋谷西署刑事課長代理のあの栗飯原警視か？

渋谷の九龍城砦に共犯者がいる可能性がある。それを伝えるにすぐさま渋谷西署に向かった。

.....

渋谷西署の刑事課に向かうと刑事の他に被疑者、情報提供者等であつた返していた。

どこの所轄もそうだがこの時期は騒々しいな。。私は側にいた芳形刑事に訪ねた。

「栗飯原警視に聞きたい事があるのだが・・・いるのか？」

「ええ、今喧嘩の被疑者釈放したとか言っていましたから、すぐ戻ってくると思いますよ、応接室どうぞ」

応接室に通されて数分後、栗飯原警視がやってきた。

「ご無沙汰です管理官。で、聞きたい事って言うのは？」

「15年前の亜細亜街壊滅についてです。先日町田東署管内で殺人事件が起きました。共犯者がこの管内にくる可能性があるのです」

「この管内というと・・・九龍城砦ですか・・・」

さすが栗飯原警視、事情は知っていたようだ。

「15年前の亜細亜街で俺はマフィアを一人射殺しました。これは警察内の機密事項として処理されています。それだけ危険な場所だったからです。武器や麻薬が横行していた特殊な場所だったもので・・・俺がやらなきゃいけなかったんです。」

確かに亜細亜街の治安の悪さは知っていた。上京してきてすぐ、「亜細亜街には近づくな」と言われたもんだ。

「渋谷の九龍城砦については何か知っている事はありますか？」

「ああ、売春が横行し出しているのは聞いています。しかしなかなかしつぽをつかむ事ができない。女がコロコロ変わるんだ。それが亜細亜街と違う点です」

渋谷西署でも検挙をしようとしているのか。。。本庁に戻ろうとしたところ、呼び止められた。

「おとなしくなったとはいえ、九龍城砦は危険です。くれぐれもお近づきにはならないように」

釘を刺されてしまった。。。どうやら私一人で動くには危険なようだ。

対策を考える為に、本庁に戻る事にした。

渋谷の九龍城砦 1 (後書き)

外国人の事件の絡み、どのような展開になるのでしょうか。

渋谷の九龍城砦 2 (前書き)

楠管理官が渋谷西署にいた時に、本庁にいた人もいます。

今回は神ノ木君視点です。

渋谷の九龍城砦 2

一応僕は警察庁から渋谷西署へ研修に来ている事になっているので月一回報告書を出さないといけない。

メールとか郵送で済ませりゃいい物だと思っただけど、面接もあるからしょうがない。

一通り終わらせて桜田門駅に向かう途中、一台の車が僕の前に止まり呼び止められた。

「神ノ木か？」

「ああ、管理官。ご無沙汰しております。捜査から戻ったところですか？」

「事件は解決したんだが思うところがあったな。渋谷西署に行っていた」

え？ウチの所轄に来ていたんだ・・・いったい何の用だろう・・・。

「ちょっと俺と一緒に来てくれ」

そう言われると僕は警視庁の捜査一課へ向かった。

捜査一課に入ると殆ど誰もいない。みんな事件で各捜査本部に詰めているのだろう。

一課長もいないや。

「そこに座ってくれ」

管理官にそう指示され、誰のかわからないけど管理官の前の席に座った。

「で・・・聞きたい事って言うのは？」

「ああ、渋谷西署の管内にある九龍城砦のことだ」

九龍城砦・・・聞いた事がある。僕が配属されてたから行った事は無かったけど。

「九龍城砦ってあれですよ？不法外国人が多きたむろしてるって噂の・・・」

「ああそうだ。今回町田東署で起きた事件の共犯者がそこにいる可能性がある。ただ、可能性ってだけにいるときまった訳ではないがな。それを伝えるに渋谷西署へ向かったんだ」

ああ、あそこは絶好の隠れ家になりそうだもんなあ・・・僕は近づきたくない。

「そう言う事だったんですね。あそこは雰囲気からして日本じゃないらしいんです。ここ数年は大きな事件も起きてないみたいですし。違法風俗を摘発するため生活安全課が動いてますけどなかなか・・・」

「そうだろうな。粟飯原警視にも近づかないように釘を刺されたよそりゃそうだ。あんなところに行ったらなんて普通は思う。」

「課長代理が？そんなにヤバいところなんですか？そって・・・」

「そこでだ。九龍城砦に行ってみようと思う」
え？え？え？

「しかしだ。私はその辺の地理に詳しくない。一緒に行ってくれるか？」

「ちよつと待ってください。あそこには近づくなつて・・・」

「それは私の身を案じての事だろう。だが我々は警察官だ。聞き込みは基本だろ？」

「それはそうですね。ちよつと怖いけど、行ってみますか。今日は管理官と用があるからって連絡を入れます」

こうして、係長代理に連絡を入れた僕は、夕方になってから管理官と一緒に九龍城砦へ向かった。

九龍城砦つて聞くからもつとおぞましいもんだと思っていたけど外見は普通のマンションだ。

1階テナント部分唯一看板が出ていた、「エレガンス」という店に向かった。

「イラツシャイマセ」

ここは日本語が通じるらしい。カウンターの方に管理官と座る事にした。

先ずはビールで乾杯。中国の「青島ビール」というもののだ。管理官が店の女の子(?)に声をかけ始めた。

「この店は長いのか？」

「ウン・・・3年クライカナ？」

「名前は？」

「ユリ」

「どこから着た」

「大連」

「どうして日本へ？」

「私、留学シテル。日本大学。水道橋ヨ」

どうやら不法滞在じゃないみたいだ。僕も聞いてみた。

「日本で何を勉強しているの？」

「国際経済。デモ・・・日本語難シイネ」

「へえ・・・でも頑張ってるんだねえ」

「私、モウ26。今頑張ラナイト・・・」

目はまっすぐ向いている。綺麗な瞳に吸い込まれそうになっていると・・・

カランカラン・・・誰かが入ってきたみたいだ。

「Oh！ テルサンイラツシヤイ」

耀さん？まさか・・・

「おう、モモちゃん、ご無沙汰だったねえ」

もう一人の女の子（？）に話しかけた声に聞き覚えがある。まずいな・・・

これには管理官も驚いている。

「ん？そこにいるのは、楠さんと神ノ木じゃねえか。こんなところで何やってんだ」

あゝあゝあ、気付かれた。もう言い逃れできないや。

渋谷の九龍城砦 2 (後書き)

二人でこっそり動こうとしたら耀さんにみつかってしまいました。

ここでの話はまだ続きます。

渋谷の九龍城砦 3 (前書き)

楠管理官と神ノ木君が九龍城砦にいたころ、別の傷害事件の被疑者をおっています。

今回は、栗飯原さん視点です。

管理官が言っていた九龍城砦にいるという情報も捨てがたいが、まだ潜伏しているときまった訳じゃない。とりあえずそっちは耀さんに任せて、俺は先日起きた傷害事件の被疑者「平良」を追っていた。情報によると、ラブホ街にいるというので対象のホテルに向かった。

受付を通り過ぎたところで聞き覚えのある声がした。

「お〜い」

振り返るとそこに居たのは・・・美果だった。

「平良を追ってるんでしょ？でもあたし先約だから」

「おいおい・・・お前は少女売春摘発してるんじゃないのかよ・・・平良は関係ないだろ」

「実はですねえ・・・あたしが用あるのは女の方。ちょっと聞いたい事があって。あたしはそれだけ知ればいいから、平良はあんたが逮捕したらいいじゃない」

相変わらず飄々としてやがる・・・それならさっさと引きずり出すまでだ。

「美果、平良はどここの部屋だ」

「待ってあげなさいよ・・・今入ったばかりなんだから。懲役で最低3年は食らい込む事になるでしょ？その間女つ気無しなのよ」

待つだど？被疑者に情けをかけようつてのか・・・まったく・・・

「で、一緒にいる女ってどんな奴なんだ」

「え？三軒茶屋あたりの女子大生よ。あそこはお嬢様学校とばっかり思ってたけど、最近はそういうのが多いみたい」

「お嬢様がねえ...たしかあそこは女子大じゃなかったか？サークルとか共学の大学が入り込んでるのは知ってるけどなあ」

そつえば、俺たちがいた大学にも女子大生が出入りしてた。

「それで、その女子大生を任意で引っ張って元締めを探そうって言うこと」

「なるほどな。…っってお前それじゃ尚更すぐ行かなきゃイカンだろ」
「実際に行為に及んだ証拠があれば、引っ張りやすいわ」

たしかにそうだ。逃げられてしまっっては元も子もないだろうからな。

・・・3時間後、平良が女と出てきた。俺は平良に近づいた。

「スツキリした顔しやがって・・・俺が情けをかけるとは思わなかったよ」

逃げようとしたので丹田に前蹴りを入れ、ひるんだところで手錠をかけた。

女が逃げようとしたが、そっちは既に美果が取り押さえていた。二人を外に連れ出したら突然銃声がして、平良が撃たれていた。

「そこ動かないで」

女を俺の車に乗せ、俺と美果は拳銃を構え後を追ったが、既にいなくなっただけだった。

俺としたことがとんだ失態だ。とりあえず、女と美果を乗せ、署に戻った。

渋谷の九龍城砦 3 (後書き)

この部分はちょっと短くなりました。
次回はもうちょっと長くできるかな？

渋谷の九龍城砦 4 (前書き)

神ノ木君が九龍城砦で飲んでいて、栗飯原さん達が被疑者を撃たれた翌日です。

今回は、神ノ木君視点です。

渋谷の九龍城砦 4

「全くなんてこった・・・被疑者を射殺されるなんて・・・」
珍しく郡課長が声を荒げている。どうやら傷害事件の被疑者を連行
する際に射殺されたらしい。

怒られているのは課長代理と依藤さん。

「で、何でまた依藤君も一緒にいたんだ？」

「あ・・・あたしは、栗飯原君のお手伝い」

え？お手伝い？ただの傷害事件じゃなかったのかな・・・何か臭う。

「まさか九龍城砦の売春地帯が絡んでるんじゃないだろうな？」

え？九龍城砦？確かに手こずってると聞いた事はあるけど・・・そ
こで課長代理が諭す。

「九龍城砦だなんて・・・それ刑事課の仕事じゃありませんから
まあ、そりゃそうだ。

「とにかく、あそこは今敏感だからつかつに手を出さないでくれよ」

「了解」

「了解」

とりあえずはお説教はおわり。課長は下の階におりて行った。

それを聞いていたらひかるさんが僕に耳打ちしてきた。

「ねえねえ、昨日九龍城砦にいったんだって？」

あらま・・・もう情報が入ってきてる。参ったなあ・・・

「ええ、行きましたよ。それがどうしたんですか？」

「あのね、あそこに今売春地帯があつて、警察をチェックしている

為に摘発が出来ないでいるの。だからうかつに生安も近づけないみたい。ま、神ノ木君は顔割れてないからいいけど」

なるほど、それで近づくななんて言われていたんだ。

感心していると、課長代理が僕と羽根田係長代理を呼びつけた。

「今の話、聞いていたな？」

「ええ、何でも被疑者が撃たれてしまったとか」

「それがだな、例の九龍城砦が絡んでいるらしいんだ」

え？え？さつき刑事課の仕事じゃないって言っていたのにどういうことなんだろう。

課長代理は続けた。

「昨日美果が追っていた女子大生、九龍城砦に関係しているらしいんだ。通名を使っていたから名前を聞いただけではわからんがな。」
何か羽根田さんが感づいたようだ。

「なるほど。表向きとしては、刑事課にとっては平良の傷害事件の捜査、生活安全課にとってはただの少女売春つてわけで、突き詰めるとそこにたどり着く」

「そういうことだ。そこでだ、お前らには九龍城砦の内偵を頼みたい。生活安全課の刑事や地域課の制服警官は皆顔が割れている。その反面お前たちはあそこに立ち入ったことがない。今こそ好機なんだ」

確かになあ・・・昨日ちよこつとだけ行ったけどテルさんは僕らが刑事だつてこと黙っててくれたし。好都合っちゃ好都合だ。

「羽根田は明日非番だったな。では、明後日から夜の間内偵してくれ。そこからは直帰しろ」

「了解。神ノ木君、大丈夫だよ、警察だってバレなきゃこないだみたいの意味もなく襲ってこないだろう」

まあ、それもそうか。でもちょっと不安だな・・・あれ？ひかるさんどこいったっちゃったんだ？

渋谷の九龍城砦 4 (後書き)

栗飯原刑事と依藤刑事が追っていた事件が意外な所で結びついたようです。

渋谷の九龍城砦 5 (前書き)

神ノ木君と羽根田刑事が内偵の指示を受けた時、生活安全課に首を突っ込んでいた人もいます。

今回は、ひかるさん視点です。

佐波さんが女子大生取り調べするから女性が必要らしく、あたしは生活安全課に駆り出されている。

本来なら依藤さんが取り調べをするはずだったんだけど、トラブルがあつて刑事課に呼び出されてるらしい。

女子大生の名前は、「木下正美」。お金はもらっていないというので逮捕も出来ず、釈放した。

なんか処女売春がどうだと言っていたから生活安全課の追っていた組織かと思っていたけど違うみたい。

佐波さんと残念がつっていると依藤さんが戻ってきた。

「あ、ひかるちゃんありがとね。で、どうだった？」

「お金もらってない自由恋愛だつていうから帰しちゃいました。所持金見たら1万円しかありませんでしたし。」

しかし依藤さんはなにか突っかかる所があるみたいで、

「その子の名前、聞いた？」

佐波さんが慌てて、

「木下正美、19歳です。持っていた学生証で確認が取れました」

「ふむむ・・・何か引つかかるのよねえ・・・」

「しかしボス、19歳だったら少女売春になりませんよね？」

佐波さんが不審がつて尋ねる。まあ、売春じゃないなら18歳以上だから条例には抵触してないけど。

この事件なんか裏があるのかしら。

あたしもなんか怪しいと感じたので、依藤さんに聞いてみた。

「あの・・・この事件、もしかして別件逮捕だったんですか？」

別件逮捕とは、本件取調べ目的で、逮捕の要件を満たす他の事件について被疑者を逮捕すること。またはそのための手法のこと。ただ逮捕してないよのね・・・。

佐波さんもなにか気づいたみたい。

「もしかして、あの九龍城砦ですか？」

九龍城砦？聞いたことがある。道玄坂の南側に位置するあの大きなマンションのことだ。付近を通ったことはあるけど中に入ったことはない。

「多分ねえ・・・でも名前聞いてその可能性高くなった。」

「名前・・・ですか？」

名前で何が怪しいんだろう・・・あたしにはさっぱりわからない。

「木下正美って言ったわね・・・『木下』を一文字にするとどうなるかしら」

「一文字ですか・・・」

佐波さんがメモ帳に狭めて書く。それに書いてあったのは『朴』の字。

あ、これが本名ってこと？でも学生証にはちゃんと・・・

「木下正美の本名は、『朴正美』。呼び方は、パク・ジョンミ。これが何を意味しているかわかる？」

依藤さんがどや顔をしていると、テルさんが入ってきた。

「おいおい・・・勝手に犯人と決め付けんじゃねえよ・・・読みは合ってるけどな」

依藤さんが驚いてテルさんに突つかかる

「どういうことですか？」

「まあまあ落ち着けて・・・さっきまでな、その大学に行つて事情を聞いてきた。確かに本名はパク・ジョンミだけど、普通の女子大生だ。サッカー部に在籍してるとよ、それも選手でだ。佐波、そいつは平良とどこで知り合ったか言つてたか？」

「ええ、SNSで知り合ったとか言つてました。恐らく本名は名乗つておりません」

「そうだろうなあ・・・SNSのやり取りも見させてもらったが怪しいところは1つもない。女子大の大学生だ。男っ気なしで寂しかったんだろつよ」

確かに女子大だと出会いの機会はぐつと減る。あたしも女子大だったからそこらへんはわかる。高3の時振られてからこの歳まで彼氏なしだもんなあ・・・

テルさんは依藤さんに向き直り、諭すように、

「今夜、ウチの課長代理と九龍城砦に行つてくるよ。何かつかめるかもしれない。あんたらは顔が割れてるから都合がわるいだろう。首突っ込んじゃまった侘びだな」

依藤さん、すぐ期限を直したみたいで、

「本当ですか？助かります。あたしが行くと連中逃げ足だけは早いんだから・・・」

こつちの事件の方は解決したので、あたしとテルさんは刑事課に戻つた。

渋谷の九龍城砦 5 (後書き)

近年、外国人による犯罪は年々増える一方です。だからと言って在日だから犯人だと決め付けるのははいけません。

そもそも現在の2世3世はほぼ日本人ですからね。

政治の話は一切言及しませんが、ちょっと最近の日本人は過激すぎやしないかと気になったのでこんな展開にしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7805o/>

超！刑事宣言

2012年1月6日20時51分発行